

339

971



始





02 /  
DREAMS

究研乃夢

論教校學中治今立縣媛愛  
著德重內之須





339-971



須之内重徳著

之  
研  
究

全

大正  
5. 25  
内装

今治阿部書店發行

九七七二 四二〇四六二	序ノ部	頁
十 二三六四五	五、六、七 九六四	行目
九八 終リヨリニ	一 二十九	字序
	七 二十一	十五字目
	視解ス日院問詢	誤
鷹嗅 脱字	視觸マ日隆門詢	正



## 序

學術の進歩に伴ひ諸般の研究行き届きて殆んど遺憾なし、唯『夢の研究』に至りては吾人未だその完全なるものを見ず、須之内君こゝに見る所ありて夙にこれが研究に餘念なかりしが、今回愈々稿を終へ、梓に上さる、その材料を取るや廣く、研究や詢に緻密なり、殊に、書中古今の和歌を引用せらるゝ点に至りては實に用意周到と云ふべし。

君は心理學專修の人にもあらざれば、哲學專問の人にもあらず、されど思想の人、冥想の人、この道に深き趣味と研究とを有せらるゝの人なり、余は君の書が今より汎く世に愛讀せらるゝを信じて疑はざるなり。

大正六年五月二十日

美須賀城下綠院の下

文學士

西田平一識す



はしがき

一夢は吾々の等しく経験する所である、而かも思へは實に不可思議なるものである、原始時代にあつては夢は客観的に眞の経験であると思惟し又夢みる人は神と交るのであると信じて居つた、かくて夢の研究は歴史以前既に行はれて居つたのである、賢人は之が解明をなして樂み、占夢を職とする者さへ現はるゝに至つた、かのロセフ、ダニエルの如き共に夢の解明に巧なりし爲め地位を得たのである。

一夢は古來下層民間には興味を以て迎へられて居るけれ共、心理學者はあまり此方面に注意を拂つて居ない様に思はれる、而かも夢の研究は心理學の方面より見るも亦興味ある問題であると信するのである、これ余がこの研究に着手した所以である。

一理論より實際、實際より経験、余は経験を經とし實驗を緯として研究の歩を進むる事とした「夢と年齢との關係」の章の如き特に實驗の方面より出でたるものである。

一各章の終に掲ぐる所の漢詩、和歌、俳句は其章中説く所と多少關係あるものを撰擇したのである。

一此研究は未だ完全なるものであるとはおもはない、他日機を得て完全に近づく事を期したいとおもつて居る。

大正六年二月

今治にて

著者誌



參考書目

伊賀駒吉郎氏著

心理學原論

上野陽一氏 共著  
野上俊夫氏

實驗心理學

高島平三郎氏著

教育に應用 兒童研究  
したる

元良勇次郎氏譯  
外 三氏

青年期の研究

小泉又一氏 著

教育的心理學

荒木蒼太郎氏著

精神病學講義

筒井八百珠氏著

改正臨牀醫典

長井庄吉氏 編

古志錄故事海

松上大三郎氏 共著  
渡邊文雄氏

國歌大觀

簡野道明氏 編

故事成語大辭典

池田籬翁 編

萬寶三世相大雜書



E. B. Titchener: An Outline of Psychology.  
 Hall: Adolescence.  
 Henri Bergson: Dreams.  
 I. B. Pringley; Dreams and their Interpretation.  
 Holy Bible.  
 Bible Dictionary.  
 The New International Encyclopaedia.

目次

第一編 緒論

第二編 睡眠

第一章 睡眠

睡眠は自然である—睡眠の必要—睡眠を催す理—母親の眠

第二章 睡眠と催眠

睡眠と催眠術に於ける催眠との差

第三章 睡眠の時間

睡眠時間は乳兒に於て最も長い—春機發動期に於ける睡眠時間—佐藤熊次郎氏の『兒童の睡眠時間に關する研究』—ワーナー氏の稱ふる睡眠時間と年齢の關係の表—睡眠時間に關する學者の見解—ナポレオンの睡眠時間—



第四章 眠りの深さ

眠りの深さを度る法—余の實驗—眠りの深さと日常生活との關係

一一

第五章 睡眠の不整齊

睡眠の不整齊は性的生活の初期に現はる—青年期の初期には深夜まで眠に就くを欲せざる事がある

一四

第六章 睡眠障碍

睡眠障碍の原因—不眠症—睡眠病—安眠法—人工浴の種類

一五

第三編 夢

第一章 夢

夢の字義—夢の原理—視覺的の夢—聽覺的の夢—觸覺的の夢—

二一

第二章 夢は意識と無意識の中間に位す

意識より益意識に至る七階段—余の實驗

二五

第三章 夢と現實

第一節 夢と現實

二九

夢と現實との關係—余の實驗—何故に一見覺醒中の經驗と關係のない様な夢を見るか—夢と現實の別—夢と現實の混合—

第二節 夢中意識と覺中意識

三四

夢中意識と覺中意識は程度の差のみ—其實例

第三節 睡眠の直ぐ前に起つた感覺は夢に影響がある

三七

中學生に付ての實驗—

第四章 夢的生活の特色

三九

運動的反應が殆んどない—忽ち忘却さるゝ—一般に遠近の差なく歲月の別がない—思想の排列に須序がない—身体的活動努力共に消失する—夢中思想は強烈で印象的である—夢に創作の力があるか—夢の徵候學上の價值—一旦醒めたる夢の續



きを見る理

第五章 夢の色

四七

第六章 夢と年齢及び其境遇との關係

四八

女子少年神經過敏の人は一般に夢像多し—乳兒期の夢—幼兒期の夢—兒童期の夢—  
—小學校兒童に付ての調査—尋常科—學年ヨリ高等科—學年に至る兒童の夢—少  
年期の夢—中學一年生の夢—一般中學生の夢—

第七章 幻覺

七一

夢に未稍的と中心的の二種ある說—中心的の夢は一種の幻覺である—幻視—運動  
幻覺

第八章 睡遊

七三

第一節 睡遊

七三

精神朦朧狀態—記憶缺損—睡遊は睡眠と覺醒の中間狀態である—自發なる事

あり又特發的なる事もある—催眠術に於ける睡遊狀態—實例三

第二節 夢魔

七六

夢魔と生理的事情との關係—夢魔に對する注意—

第三節 寢言

七七

寢言と夢—

第九章 夢に關する傳説及び迷信

七九

第一節 夢に關する傳説

七九

傳説の由來—支那に於ける傳説—李白の夢—江淹、羅含、劉蕡、王勃、伊尹章、  
黃帝、穆公、高祖、黃帝、天瀟、張鷟、王恂、陸機、張瞻、孫堅、蔡惠、黃  
巢、魏延、等の夢

吾が國に於ける傳説—後醍醐天皇の夢—豊臣秀吉—藤原兼家—伊奈忠政—の夢

第二節 夢に關する迷信

八四



列子周穆王篇に現はれたる支那人の夢に關する思想—迷信の盛なる時代—三世相に出てたる吾か國古來の夢に關する迷信—現今世に行はる夢に關する迷信—歐米に於ける夢に關する迷信—般成式の惡夢を避くる法—

## 第十章 聖書に現はれたる夢の研究

一〇四

### 第一節 舊約全書に現はれたる夢の研究

一〇四

ヤコブの夢—獄中の夢—バロの夢—ギテオンの夢—大夢—耶利米亞記—及ブカデネザルの夢—ダニエルの解明—ダニエルの夢—虚偽の夢

### 第二節 新約全書に現はれたる夢の研究

一一一

ヨセフの夢—ヨセフの夢第二—

## 結論

一一三

# 夢の研究

須之内重徳著

## 第一編 緒論

夢は何人の經驗にもある事なれども、思へば實に不可思議なるものである、原始時代にあつては、眠れる人の夢に一種神怪不可思議なる意味をつけて居つた、これ彼等は等しく夢は、自己の意志を以て制する事も出来なければ、又理性によつて説明する事も出来ぬ所から、かゝる觀念を抱くに到つたものである。

彼等は、夢は客觀的に眞の經驗であると思惟し、又は神か夢みる人を訪れるのであると信じて居つた、されば度々夢みる人は聖き力の媒介者であると考え、當時の人々は、時に身體の一部を絞る、又は麻醉劑を用ふる等、人爲的の法をこらして夢みんとさへしたのである、世の進展につれてこの思想は一變して、夢は一種神の警告である、吾々は之によつて未來を推知し得るものと考ふるに到つた、即ち神は吾々に夢を送るのであると信するに到



つた、彼のバビロン人、アラビア人等の間には、此理によつて夢が深く重んぜらるゝに到り、終に職業的の夢判断者が現はるゝに到つた、この思想は支那に於ても早くから現はれて居つたのである、列子周穆王扁に、

覺有<sub>二</sub>八徵<sub>一</sub>、夢有<sub>二</sub>六候<sub>一</sub>、奚謂<sub>二</sub>八徵<sub>一</sub>、一日故、二日爲、三日得、四日喪、五日哀、

六日樂、七日生、八日死、此者八徵、形所<sub>レ</sub>接也。

奚謂<sub>二</sub>六候<sub>一</sub>、一日正夢、二日靈夢、三日思夢、四日寢夢、五日喜夢、六日懼夢、此

六者、神所<sub>レ</sub>交也。

とあるを見れば、彼等は夢に六候あるを曰へると共に神所交也との思想を有して居つたに相違ない、

尙周禮春官占夢扁に、

以<sub>二</sub>日月星辰<sub>一</sub>、占<sub>二</sub>六夢吉凶<sub>一</sub>、一正夢、二靈夢……………

とあるを見れば、彼等は夢に多大の興味をもつて、之を占つた事が明かに推察される、かくて周には占夢の官さへ有つたのである、

又周禮占夢の扁に、大卜掌<sub>二</sub>三夢法<sub>一</sub>、一日致夢、(謂<sub>二</sub>出<sub>二</sub>於思慮<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>因而者<sub>と</sub>)、二日畸夢、(奇怪之夢)、三日感夢、(無<sub>二</sub>心所<sub>レ</sub>感之夢<sub>一</sub>)、と言つて居る、かくて夢は一種神より吾々に、送り來るもの、換言すれば夢は神の告であるとの思想は早くより、盛んに行はれて居つた、かくてこそ、占夢の官はおかれ、夢判断を職とする者も次第に現れ來り、巫術、幻術の如き、思想の發達せる人々からは、排付せられて居るけれ共、尙一般に廣く、行はれて居つた、吾國に之を見るに、三世相なる書を繙けば、そこに、夢合せなる一章があつて、夢に關する占人の思想の一端を知る事が出来る、かく、古來神怪不可思議なる、ものとして、之によつて神明に通じ、又は吾々の未來を知り得べし等、思惟して居つたとの夢に關する研究は、實に興味あるものと、言はなければならぬ、この意味に於て、余は或は生理的方面から之を觀察し、心理的方面から考究し、經驗の方面から立論して、その研究を進めんとする者である、而かも夢と睡眠は離るべからざる、密接の關係があるされば、夢の研究に移るに先立つて、まづ睡眠の研究から初めなければならぬ、これ睡眠の研究を先にして夢の研究をその後にした所以である、



- 初夢や思ふて寝たる日の光
- 初夢や思ひの外の事ばかり
- 初夢の聞人となるや風呂貴
- 初夢や寢言にもいふ君は千代

安室  
立字  
半窓  
季吟

## 第二編 睡眠

### 第一章 睡眠

睡眠は脳髓の勢力を恢復するに必要なもので、全く自然である、リズム的に來るものである、さればかの昏睡状態や、薬品を用ひて人為的になせる、無意識の状態や、其他病的に意識を失へる場合は自ら異なつて居る、吾々は六週間以上断食しても生命を保つ事が出来る、言つて居るけれ共、この睡眠を数日間断つに至れば、既に絶命をまぬかれぬのである。

睡眠の生理學上の、著しき徴候は、大脳皮質の貧血である、筋肉の活動は衰微し、呼吸は次第に緩慢となり、深くなつてくる、又脈膊は次第に緩く、弱くなり、動脈の壓力は弱められる、而かも吾々は何故にこの睡眠を催すに至るかと言ふ點に至つては、簡單に之を説明すれば、心身の疲勞に因る理だけれども、學者は之を次の様な方法によつて説明せんとしておる。



一、循環系統の方面より説明せんとする者。

或は睡眠は静脈の充血に因る大脳に於ける壓迫の結果であると言ひ、又は之に全く反對に貧血による者として説明せんとしておる。

二、化學的に説明せんとする者。

或は炭酸瓦斯の泡和に因ると言ひ、又はある毒素、例へば、トスインの如きものが體內に生ずる爲であると説いて居る。

三、神經の分離に因るものとして説明せんとする者。

睡眠の原因かその何れにあるかは吾々のあまり關する所でない、而かも睡眠は全く、吾々が外物に對して、興味を持たなくなるのである、彼の赤兒を抱いて眠れる母親は、風雷の音にも醒めぬ程深く眠つて居ても、嬰兒の低き泣聲には驚かされて、直ちに醒むるものである、即ち母親は嬰兒の爲めには全く眠つて居らぬのである。

## 第二章 睡眠と催眠

自然に來る睡眠と催眠術の催眠とは決して同一ではない、兩者相似たる點もあるけれども、今便宜上、其差異の點を擧ぐれば、睡眠は深くなれば、なる程、暗示に感應せぬ様になるが、催眠の場合は、深くなるに従つて、暗示によく、感應する様になる、かくて催眠者は暗示を與ふれば眼を閉じて、歩行し、談話し、其他あらゆる事を爲す、而かも彼等は覺醒後は多く此等の事を記憶しておらない、前言せし如く睡眠者は仲々暗示に感應しないは勿論、若し暗示を與へても其言語が睡眠者には聞えない、万一聞ゆれば、早や睡眠より醒めて、常態に復するのである、催眠者は施術者以外の人は容易に、何人も之を覺す事は出來ない、深き催眠状態にある者は之を歐打し、創傷するも覺めない面白ではないか。

## 第三章 睡眠の時間

睡眠は自然である、人は勿論、動物や植物さへ眠るのである、かくて睡眠は腦髓の勢力を恢復するに必要なものであるから、不足してはならない、睡眠に要する時間は、乳兒に於て最も長く、生后一年位のもは一日の三分の二を要する、それより次第に長するに従



つて其時間を減じ、六年乃至十四年の學齡兒童にあつては、十時間乃至八時間が通常である、これに依つて見れば睡眠に要する時間は年齢によつて、同一でない、尙實際吾々の實行してある、睡眠時間は其年齢によつて差があるのみならず、其境遇により、職業により、時間により、其精神状態如何によつて全く同一でない、殊に春機發動期にあつては、實際の睡眠時間は、大に減少し、且其睡眠状態も一般に不安定である、これ此時期に於ては、彼等の身體上に於ける、種々の變化がある、従つて、精神上に此等の影響が及んで來るかである。

注意すべきは、此時期に於ては、睡眠中、性的器管が他の異性の夢を見る様な事がある爲めに、刺戟を受けこゝに、始めて新機能を發動する事が屢々ある、此點に關しては當人は勿論其父たり、母たる人は、時に相當の注意を其子女に對して拂はなければならぬ、青年が、かの生理的惡習に染むも亦此時期である。

睡眠の時間に關する研究としては、廣島高等師範學校教授佐藤熊治郎氏の「兒童の睡眠時間」なる研究が、雜誌、學校教育第二號に掲げられて居る、一讀の價値があると思ふ。

次に、ホール氏か其著、アドレサセンス、ハワーナー氏の研究なりとして掲ぐる所によれば、睡眠に要する時間は左の如くである。

年 齡	毎夜睡眠時間
8-9	12
9-10	11 $\frac{1}{2}$
10-11	11
11-12	10 $\frac{1}{2}$
12-14	10
14-15	9 $\frac{1}{2}$
15-17	9
17-19	8 $\frac{1}{2}$

尙作業と睡眠の時間を合せ記すれば

年 齡	毎週作業時間	毎夜睡眠時間
8-9	15	12
9-10	20	11 $\frac{1}{2}$
10-11	25	11
11-12	30	10 $\frac{1}{2}$
12-14	35	10
14-15	40	9 $\frac{1}{2}$
15-17	45	9
17-19	50	8 $\frac{1}{2}$



即ち八歳より十九歳までの間に就て、之を見るに毎夜の睡眠時間と、毎週の作業時間とは年齢によつて反比例をなし、睡眠時間は年齢の高むと共に減すべきものだけれ共、作業時間は年齢の高むると共に増加して来る、八歳の兒童は一週十五時間、之を一口にして言へば僅かに、二時間餘の作業時間を適當とするに、十九歳に到れば一日平均七時間以上の作業に堪へ得る者として居る。

此處に注意すべきは、此睡眠時間に關する學者の見解の全一でない事である、例へばデュルク氏の如き、五歳乃至六歳の兒童の睡眠時間は毎夜十三時間三十分を要すべきものであると述べ居る、一方に於てハートル氏の如き同一年齡の兒童に對して毎夜十一時間の睡眠時間を配當して居る、之によつて見れば、學者が同一年齡の兒童に對して配當したる時間には二時間半の相違が表はれて居る、自分はホール氏の研究を最も穩當なるものと認めてこゝに之を掲げたのである。

睡眠の時間に關する研究は大体右の通りであるが、一代の英雄ナポレオンの如き、一日僅かに二三時間位の睡眠をこるに過ぎなかりしも、あれ丈の偉業をなし遂ぐるに些少の障礙

を感じなかつたと言はれて居る、是等は一の特例として之を見るも世には一日五六時間位の睡眠を常習とする人も決して少くない、と言ふ事を忘れてはならぬ。

#### 第四章 眠りの深さ

眠りの深さに關する研究は仲々興味ある問題である、最初吾々が眠に就てから再び醒むるまでは決して、其深さは同一ではない、初め床に就て、眠らんとしてしばしは眠られない自己の事、他人の事、その日ありし事どもを考へなごして、時に覺とも睡ともわかぬ朦朧状態に陥り夢などを見る事がある、而かも通常の人にかくする内、十五分間もすれ大低眠つてしまふ、三十分間も經過すれば大低熟睡の域に達する、この域に達すれば、あらゆる感官は殆んど全く休息して、まづ無意識の状態に陥る、この時期が眠りの最も深い時である、而かもかゝる熟睡状態は長く續くものではない、眠りは次第に淺くなり、深くなり、淺くなり、淺くなりして終に再び醒むるのである、吾々がよく夢をみるは、この眠りの淺い時である、全くの熟睡状態にある時は、夢みる事な極めて稀である、若し夢みる事があ



つても吾々は殆んど記憶して居らないのである。

さて此眠りの深さを實驗するには、普通聴覺を通してこれをなす、即ち聴覺の刺激閾を檢査すれば眠りの深さは測定さるのである。上野陽一氏が其著實驗心理學に於て、實驗の結果人が眠つてから約十五分間を経過した時に當つては、一百の強さの音にて之を覺醒せしむる事を得るとすれば、睡眠後四十五分乃至一時間位したる后、之を覺醒するには約二万、即ち二十倍の強さの音を要すると言つて居る。されば吾々が最も深き眠りに陥るは睡眠後約一時間位の時である、而かもそれより吾々の眠りは淺くなり、深くなり又淺くなり終に覺醒するのである。

自分の宅に生后十一ヶ月の女兒がある、この女兒に就て實驗した結果、やはり上野氏の實驗の眞なる事を知る事が出来た、即ち眠つてから十分や十五分間位の時には、僅かの刺激にも驚いて直ちに覺めてしまふけれど、四十分乃至五十分間も經過すれば一寸した刺激位では容易に覺めない、と言ふ事實を認めた、而も注意すべきは大人の眠りと嬰兒の眠りとの間には、その趣を異にしておる點の少くない事である、此事實はこれを日常生活に應用

すれば面白いと思ふ、夜分外出して歸宅せし時など若し家内が多人数なる時は、各人の眠りの深さは自然同一でないから誰か淺き眠りに、夢みたり、又は全く覺めて居る者もあるかもしれない、されば誰か起き出で、來るに相違ない、されど自分の外只一人しか、家族が無い場合の如き、夜おそく歸宅せし時など、他の一人が深き眠りに陥つておるならば少し位な刺激を與へても容易に覺めない、されば聲を上げまして、叫んでも仲々覺めぬ事がある、自分には妻と生后十一ヶ月の女兒の二人の家族がある、かつて友人の招きに應じて一夜十二時頃まで共に楽しく語り、十二時半頃に歸宅した事があつた、呼べども仲々覺めない、尙續いて聲を上げましても容易に覺める模様がな、時に自分の宅に隣れる家に住める人は、淺き眠りの状態にあつたと見えて、覺醒した様子であつた、餘儀なくそのまゝに打ちすて置いて、しばし沈黙し、十分時程經過、呼びたるに計らずも一聲で覺めたのである、家に入つて右の事實を語りしに、本人は全く知らなかつたと言つて居つた、而かも十一時半頃まで讀書などして待ち居りしに、眠ることもなく眠つたのであると言つて居つたされば彼は丁度深き眠りの状態に陥つて、殆んど夢なき熟睡の域にあつたのであるふ、若



しかゝる場合には、吾々の眠りは睡眠后四十五分乃至一時間位の時が最も深く、それより十五分間位を一期として浅くなり、深くなり又浅くなるものであるこの事實を心得て居れば餘程助けになると思ふ。

## 第五章 睡眠の不整齊

自分が約二百の中學生に就て調査した所によれば十七、八、九歳位の青年は殆んど、其七〇パーセント以上が、一旦床に入つても容易に眠られない、眠らんとすれば尙眠られない時には就床后二時間も三時間も眠られない、甚しき者に至つては、起きもせず寝もせず者さへ珍らしくない、と言つておる、彼等青年の大部分は、この睡眠の不整齊にいたくなやんで居るのである、思ふにこの睡眠の不整齊は春機發動期、即ち性的生活の初期に於て現はるゝものである、これ今まで無雅氣にして、單純であつた彼等の精神生活は、何時しか他の異分子を混するに至り、異性に對する情念を感じそむるに至つて、始めて此習慣に染むのである、されば此時代に於ける彼等の夢は、十二、三歳頃の如き無雅氣な夢は見

る事少くや、複雑なる方面の變つた夢を見る様になる、時には眠りになやむ青年が、漸く眠つたと思ふと、そはなを睡眠と覺醒の中間に位する、冥想沈思の失神的状態であつて、激烈なる夢に襲はれて、早曉の疲勞を來す事も稀でない。

青年期の初めに當つては、自ら深夜まで眠に就く事を欲せず、或は小説に耽り、小説的、冒險的、空想に馳られ、時には外出を好み、殊に月明き夜等は、一種えもいわれぬ感興にうかされて、書齋に勉強し、又は床に入つて早くより、眠に就く能はざる事は、吾々の青年時代によく經驗する處である。

ホール氏の言によれば、此等の習癖の内或者は、吾々の祖先の放浪生活の遺習である。

## 第六章 睡眠障碍

青年期の初期にあつては、多く睡眠不整齊の爲めになやまされ、一旦床に入つても容易に眠られない、時には二時間も三時間も眠られない事がある、その甚しき者に至つては、不眠症に罹る事がある、さてこの不眠症は時に各種精神病の先驅となる事もある、又諸種の



精神病の初期には不眠症を發するものと見る事も出来る、さて沈鬱、發揚、妄覺、亢奮等皆其原因である。

不眠症もその輕きものは精神の沈靜と共に去るけれども、其甚だしい者に至つては容易に癒らない、されど精神病者も慢性症にはこの睡眠障碍なく、かの缺損狂者の如きは多く、たへず眠るのである、世に神童、又は天才と呼ばれ、小兒期に才氣秀絶せる者が春機發動期に至つて頓に智力の發達を中止する者の如きは、早發缺損狂とて、一種の缺損狂である

(荒木氏精神病學參考)

**睡眠病** 一方に睡眠障碍あると共に、こゝに睡眠病がある、かの熱帶地方の西部アフリカの住民の間にある、一種の流行病である、罹病者は最初氣力衰へ、身体は衰弱して、皮膚蒼白となり活氣を缺ぐに至る、眼瞼は脹れ上り、皮膚に發疹が現はれてくる、終には談話中と言はず、食事中と言はず、眠る様になる、病勢が進むと共に瘦せ衰え、營養不良梅毒の發現に次で痙痺を起し終に死ぬのである。

その期間は發病后約四ヶ月にして、時に數年に亘る者もある、而かもこの病の不治なる事

は記憶しておらなければならぬ。(エンサイクロペディア參考)

**安眠法** 意識は變調に富むものである、變化は意識の成立に缺ぐべからざるものである。變化多く變調多ければ意識は盛んである、之に反して變化少く變調乏しければ、意識は愈々無意識に近づくものである、この理を應用すれば吾々は時に輕微なる不眠症を醫する事が出来るのである。

見よ其音高き瀧水の音も、變化變調がなければ吾々はしばらくにして其音に馴れるのである自分の知人が大三島にある、一時強度の神經衰弱に罹つて、いたく不眠症に苦しんで居つた、時恰も盛夏の候全氏は全地の臺の瀧と呼ぶる、一小瀧の景色に思はず親むに至り、毎日の如く瀧の下に遊び、清き水に口漱ぎては側なる一小亭間四方形なるに、打ち横つて瀧水の音に耳傾けて居つた、計らずも睡眠を催し、久しぶりに楽しき眠りに入る事が出来たと云つて居つた。

自分の寓居の前に數ヶ月以前から石屋が出来た、自分は勿論其當時産后間もなき、妻もいたく其音に惱んで居つたが一句ならずして、其音に馴れ今はその音を聞かでは眠られぬと



言ふも過言でないと思ふ程になつた。

十七歳乃至十九歳の青年學生に付て、調査せし所によると、彼等の大多數はかゝる時に際して次の様な、方法によつて安眠を樂まんとしておる、平凡など思ふけれ共、こゝに掲ぐる事にした。

- 一 時計のカチ／＼と言ふ音に耳傾けて居れば、何時とはなしに眠むたくなつて來る。
- 二 一より百位まで數へて居るか、又は自己の呼吸を數へて居るといつとはなく眠つて居る。

かの嬰兒を眠らしむる時に當つて、母親がネン／＼ヤと嬰兒の聽覺に單調なる而かも氣持よき刺戟を與ふると共に、一方の手を布團の上にして輕き壓力をたへず單調に、與へおれば嬰兒が何時とはなしにすやく／＼と眠るも、亦此理に外ならぬのである。

尙其原因如何によつては一旦外出するとか、讀書をなす等の轉氣法を用いても効がある。而し全く病的に、なつておる者は次の様な療法によらなければならぬ。

攝生を嚴にして作業を課し、全身微温浴、坐浴、下腿温濕布、纏絡法、按摩術を行ひ、

又は頭に平等電流を通じ、若し己むなくば、催眠劑を用ふるのである。(荒木氏精神病学より)  
右の内簡單に實行の出来るものは温浴法である、普通の錢湯でもよいから、不眠に苦しむ時は温浴して睡眠を催すまで、浴して眠むたくなつてから床に入れば夢に襲はれたり、不眠に苦しむ様な事はないと思ふ。

作業は精神を誘導して外界に適應せしめ、吾々の催進せる聯想をよく牽制、調節するは勿論、筋肉循環を催して食慾を進め、其疲勞によつて睡眠を催す功がある、かくて吾々は殆んど夢なき熟睡を樂む事が出来るのである。

尙胃腸の通利を計り、皮膚を清潔にするもよく、晚餐の量を減じ就寢時間を早め、又は脚浴、芥子浴、マッサージ等皆共に相當の効力があると言はれておる。

筒井八百珠氏は其著、改正増補臨床醫典に於て人工浴に關し詳しく述べて居る。今この研究上必要な個所を左に掲ぐる事にした。



寒水浴(攝氏十度—二十度)

冷水浴(全 二〇—二八)

人工浴 微温浴(全 二八—三四)

温浴(全 三四—四〇)

熱浴(全 四〇—四五)

全身浴(頸部以下全身を没する者)

半身浴(心窩以下半身を没する者)

坐浴(腰部以下を坐浴する者)

局所浴(其浴すべき体の一部のみを浴する者)

浴法

寒水 四、五分間

冷水 六、七分間

微温浴 二〇—二五

熱浴 一〇—一五

時間浴

第三編 夢

第一章 夢

夢は寢目又は寢見の轉と言ふ、睡れる中の物思ひに、現の如く物を見る事であると、言海に言つて居る、其字義は今こゝに論ずる事をやめて、生理上より此夢を観察するに、夢は大體の場合に於て、ある器官の刺戟に歸因するもので大體の内に、その原因を起す場合は極めて稀である、見よ吾々は其寢室を意の如くに暗くする事は出来る、而かも網膜に入り来る光塵を制し、又は耳の血液循環や、其鼓動を靜むる事は出来ない、皮膚及び其他諸器官の刺戟を除く事は尙更困難である、即ち睡眠中と雖も諸器官からの刺戟は極めて微弱ながら、腦の方へ來るのである、かくて夢中意識は、ある感覺的刺戟から其出發点を發して居る。

吾々の日常の夢は、重に視覺より來るものなれば、今便宜上視覺の方面より之を見るに、



今眼を閉じてよく注意して見れば、初めは暗黒の外何物も見えないが、次第に黒い物が見え更に輝く部分が現れ来り、又は色々の色彩さへ現はれ来る様な氣がする。これ吾々のよく経験する所である、學者はこれを或は網膜の循環に於ける一の作用であると云ひ、又は閉ぢたる眼蓋が眼球に與ふる一種の壓力によることも云つて居る、其理由は二者の内何れにせよ、此事實が即ち吾々の夢の材料となるのである、換言すれば眼を閉ぢても、尙明暗の區別は勿論、時には光の種類さへ辨別する事が出来る、これが多くの夢の根底となつて居るのである。

例へば突然睡眠者の室に、火を點じたとすればその光の像に支配されて、其室全体又は家が火に包まれた様な夢を見る事がある、ベルグソン氏は其著『デウリズム』中に此種の例を擧げて面白く説いておる。

**視覺的夢** 視覺は睡眠すると共に、第一に消失し覺醒に際しても、<sup>最後</sup>に恢復さるゝのである、而かも吾々の日常の夢は、この視覺の方面に偏重して居る、何故に吾々の夢がかくも視覺に偏重するかと言ふに、吾々は覺醒中には多くの場合、視覺を通じて考へ想像

し又は記憶するのである、この總べての物を視覺化する習慣は、自然夢に現はれて来る、又網膜は睡眠中と雖もたえず内部の刺戟を受けておるから、一寸した事にも感するのである、而かもこの刺戟はかなり屢々與へらるゝのである。

第三には他の諸感覺より来る夢も、時にこの視覺の夢に變化する事がある。

今肋間に些少の苦痛を與ふれば、睡眠者は劍をつき込まれる、夢を見るか、又は狂犬に吠まらるゝ所の夢を見る、かく皮膚に與へられたる刺戟も轉じて視覺的の夢となるのである、

(ニュー、インターナショナル、エンサイクロペーティアより)

又皮膚に刺戟を與ふれば、毛蟲の類が匍ふ様な夢を見る事がある尙聽覺より入り来るものも多くは視覺化されるのである。

**聽覺的夢** 一旦眠つても吾々はたえず外部より来る音に感じつゝある。家具のガチャ／＼言ふ音風の音や雨の音、此等が夢に入つては會話となり、唱歌となり、叫びとなり音楽となるのである。

かの夢で人と語り、音楽を聞く事がある、而かも一旦覺むれば、今まで共に語りし人は居



らない、思へば實に不可思議である、されど無より有の生ずる理もなければこれまさしく風の音や戸の音が夢に入つて、或は人の話し聲となり、氣持よき音楽ともなつたに相違ない。

**解覺的夢** 此種の夢は多く視覺的夢に轉化す傾向がある。

今吾々が事物を知覺する理を考ふるに、感覺は必ず大脳の物質變化と相關係して居る。さて皮質内に印像を留むるものである、これを普通記憶像と稱へて居る、この記憶像は無識界に潜伏して、感覺又は聯想に因つて識界に入るものである、この有識記憶像を學者は表象と名付けて居る、所が無識界に潜伏する記憶像は、初め之を生じたる刺戟と同一の刺戟に會へば充奮せられて有識表象に變ずるのである、これが即ち知覺である。

吾々が覺醒中には、現はれ來る記憶像は澤山ある内で、現在の状態に關係のあるもののみであるが、睡眠中にはあらゆる記憶像が自由に腦裡から飛び出して來て互に入り混つて居る、されば覺醒中には見るもの、聞くもの悉く之を明瞭に知覺し得るにも係らず、睡眠中は眼に見ゆるもの漠として、耳に聞ゆるもの亦不確實である、而かもこの各記憶像と感覺

の間に少しでも統一がつけば夢となるのである。

八月十八日夜夢<sub>レ</sub>攻<sub>二</sub>諸厄利亞<sub>一</sub>

藤田 東湖

絶海連檣十万兵 雄心落々壓<sub>二</sub>孤城<sub>一</sub>

夢覺三更幽窓下 唯有<sub>二</sub>秋聲似<sub>二</sub>雨聲<sub>一</sub>

芳野 懷古

河野 鐵兜

山禽叫絶夜寥々 無限春風恨未<sub>レ</sub>消

露臥延元陵下月 滿身花影夢<sub>二</sub>南朝<sub>一</sub>

## 第二章 夢は意識と無意識との中間に位す

變化多く、變調に富む意識と、變化に乏しい無意識との間の境界は決して絶對的に之を別つ事は出來ない。嚴密に之が境界をたてんとすれば、二者の間の差違は益々得がたくなる様な感がする。

人が漸く眠らんとする時には、宛も日暮に日光が次第に薄く終に黑白か別らない暗夜に至



る様に意識は次第に朦朧となり終に熟睡の域に達すれば、何も辨別する事が出来ない様になる、之に反して眠りの將に覺めんとする時には、宛も夜が次第に明るる様に、意識は次第に明瞭になつて再びよく覺知、辨別する様になる、これ意識の状態に復したのである、かくて極めて活發に活動して居る意識の状態から、無意識の状態に至るには幾多の階段があつて、無意的より有意的に、有意識より直ちに無意識の状態に移りゆくものではない。伊賀駒吉郎氏は之を次の七階段に別つて居る。

- 一、吾々が自己の利害得失などに關する事件に付て平靜に考へつゝある場合
- 二、自己に利害の關係もなく、また興味もなき他人の談話などを聽聞せる場合
- 三、日中の作業に疲れたるのみならず、差當り興味ある事件なきまゝに漸く坐眠を催し、然かも時々種々の外界刺激によつて朧げなる注意を喚起する場合  
吾々が學生時代、試験の準備に忙殺され、夜遅くまで勉強して居る場合など屢々かゝる心的状態に陥る事がある、鼠の天井を走る音に驚かされて、消えんとする注意を喚起し、再び書籍に向つて勉強を初む様な事も一度や二度ではない。

はない。

- 四、仮寝して夢みつゝある場合、若しくは明かに夢みつゝある折の朝の輕睡の場合
- 五、醒后猶明瞭に記憶に存するが如き比較的、變化統一ある夢を結びつゝある折の睡眠の場合

六、醒后全く記憶に存せざる漠々たる夢像の浮動する場合の睡眠

七、概に就眠后まもなく起る所の全く夢なき極度の熟睡

八、昏睡病或は熱病時の睡眠

以上八階段の内一より六までは吾々が日常よく經驗する所である、只七の全く夢なき極度の熟睡状態に關しては學者間に種々の議論がある、或學者は如何に熟睡しても、全く夢なき事は不可能である、若し醒后全く夢を見ない様に思ふ事あるも、それは夢みざるにあらずしてたゞ記憶に存せざるのみと云つて居る。

他の學者は、例へて微弱なりとも、幾分か意識的分子が存して居らなければ夢みる事はないされば一旦夢みたる以上は、明瞭に其夢を記憶して居らなくても、醒後、何か夢中に浮動



せりこの事位は記憶し居るべき筈であると主張しておる。

約二百名の中學生に付て調査せし所によれば、不健康體の生徒は醒后何だか夢を見た様な氣がすると言ふ様な事も時々ある様子に見受けられたけれ共、其大多數の者は全く夢なき極度の熟睡を樂みつゝある事が明つた、されば調査の結果はかゝる極度の熟睡状態はないと云ふ事は出来ない、自分が内省の結果もやはり右の調査と一致して居る、而かもかゝる熟睡状態の時間は極めて少時間に相違ない、其前后に於てはやはり夢みるものである、夢みる事は夢なき睡眠よりは覺醒の生活に近似せるは明白なる眞理である、されば夢は意識より無意識に、無意識より意識に移る二者の中間に位するものと云ふべきである。

巳巳暮秋北豊囚中作

人見勝太郎

秋堂秋冷雨潜々

一默禪燈客枕閑

豪氣未消半宵夢

指揮殘卒戰函山

秋夜風雨大作

陸游

僵臥孤村不自哀

尙思爲國成輪台

夜蘭獨聽風吹雨

鏡馬氷河入夢來

### 第三章 夢と現實

#### 第一節 夢と現實の別

夢と覺、即ち夢と現實の間に深き關係ある事は誰も之を認めて居る、夢中意識は大體に於て吾々が覺醒中に見聞したる事物の内、特に興味をひきたる物が、若しくは非常に嫌へる事物の支配を受けて居る様に思はるゝ二百餘人の中學生に付て調査せし所によれば、此事實が明かに證明されて居る、試験前數日間は其五〇パーセント以上の者が試験に關係ある夢を見ておる、而かも試験終了後に至つては、彼等の最も興味を惹くものは試験の成績である、彼等は其發表の一日も早からん事を希望して居る、従つて此時期に於ける彼等の夢は等しくこの方面に集中して來るのである、或者は試験の成績不良なるを憂ひ、その夜落第したる夢を見たと言つて居つた。

かく覺醒生活中興味多き事物で吾々の夢中意識は占領さるゝけれ共、覺醒中の事物がその



儘現はれて來るとは限らない、時に全く形を變へて來の事もある、されば時には覺醒中に於ては如何にしても到底意の如くならぬ困難なる事柄が夢中に於ては自由に動かし、飛ばし、己が意の如くに指揮し支配する事が出来るのである、或者は身體に二枚の翼生じて自由に空を飛び廻つた夢を見たこと云つて居る、同時に他の者は夢で二三十貫もある鉄棒を振り廻したと云つて居る、彼等は覺醒中には空を飛び能はざるに夢中には自由に飛び廻り、大人さへ振り廻す事の出来ない鉄棒を小兒が自由に振り廻す事が出来るのである。之に反して覺醒中極めて簡單に明瞭で、容易なる事柄が夢中に於ては複雑に、不明瞭且つ困難に感ぜらるゝ事がある。

而かも夢は第一章に説ける如く、記憶像の現出せるものなるが故に、新奇なる物體又は音聲など現はる様な事があつても、皆すでに存在せる記憶像の新なる結合を爲すに外ならぬ調査の結果によれば、夢界を組織せる要素は、たとへ新奇異様な聯合をなす事があるけれども、之を分析すれば少數の例外を除いては、覺醒時に於ける經驗から來て居る。されば夢界を組織せる要素は人により、その智識の程度によつて同一でない、未だ自轉車

の發明なき以前にその夢を見たる者あるを聞かない。

吾々は何故に一見覺醒中の經驗と全く關係のない様な新奇、異様な夢を見るかと云ふにたとへ睡眠中と雖も呼吸器や、消化器はたへず活動して居る、さて此等の諸器官より絶えず内的刺激が來て居るのみならず、音響、接觸等の外的刺激も度々來るのである、されば吾々は二六時中外界との交渉は一秒時も絶ゆる事はない、而して此等内外より來る弱き刺激が覺醒中に經驗したる事物の殘果と結合して一新奇世界を組織するのである、かくて時に不合理的なる結合をなす結果奇異なる夢を見るのである。

かく論じ來れば吾々は夢と現實を分離して考ふる事は出来ない、認識論上から云へば現實の知覺と夢像とを比較すれば、理論的には之を區別する事は出来ない。

吾々の有する意識は現實なりや、夢像なりやを區別する事は困難である、吾々は床を離るゝに際し昨夜夢を見たと思ふ事がある、而かも其夢を見ておる間は之を現實であると信じ或は喜び或は怖れ、又泣いたのである、此點より人生は一の大夢に過ぎないと云つて居る人もある、かの莊子齊物篇に



夢飲酒者且而哭泣。夢哭泣者且而田獵。方其夢也。不知其夢也。夢之中又占其夢焉。覺而後知其夢也。且有覺。而後知此其大夢也。而愚自以為覺。竊竊然知之。君乎。牧乎。固哉。丘也與女。皆夢也。予謂女夢亦夢也。

と云へる畧境人生の大夢に過ぎざるを云へるものである。

夢と現實の混合 時に吾々は夢と現實を混合して二者の別を認識する事の出来ない様な場合がある、この傾向は特にヒステリー等に罹つて居る者に甚しい様に思はる、新聞記事によく注意して居れば、盜賊が二階の雨戸を押し開けて入り來り、金庫を破つて金錢を取り出したその儘逃走した様な夢を見た者が、覺醒后全く盜賊に襲はれたものと信じて早速警察署へ盜難届を差出し、其后調査の結果全く夢であつた事が明白になり一場の物笑ひとなる様な例は割合に澤山ある。彼等は此場合全く夢と現實を混合したのである。されど全しく齊物篇に

莊周夢爲胡蝶

栩栩然胡蝶也

自喻適志與

不知周也

俄然覺則遽々

然周 不知周之夢爲胡蝶與

胡蝶之夢爲周與

周與胡蝶

則必有分矣

此之謂物化

とあるを見れば莊周も夢と現實との間に差別ある事を認めて居る。岡野儀三郎氏の如き、夢と現實の區別あるべきを信するけれ共、理論上から考ふれば此區別は唯だ程度の問題であると思はれて居る。面白い言であると思ふ。

前大納言 爲兼

なくくも人を恨むと夢に見て現に袖をげに濡らしぬる

業平 朝臣

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏みわけて君を見んとは

中臣 祐臣

よしやそのさむる別はつらくとも見る程だにも夢と知らずば

平宣 時朝臣

逢ふと見て覺むる現のつらさにもこりすや夢を猶頼む覽



平時村朝臣

思寢の夢の枕に契りしも覺めてはもとのつらさなりけり

西行法師

なき人もあるを思ふも世の中は眠のうちの夢とこそみれ

後鳥羽院御製

何か思ふ何かは難く覺めやらぬ夢の裡なる夢の現世を

衣笠内大臣

まごろまぬほどを現と思ひしは夢の世しらぬ心なりけり

權中納言宗泰

まごろまぬ今朝のまたねの床にだにづらき別は夢かごぞ思ふ

### 第二節 夢中意識と覺中意識

吾々は熟睡中と雖もたえず内外より刺戟を受けつゝある、尙夢中意識は大體に於て覺醒中

に經驗した事物で占領せらるゝが常なれば兩意識間の材料に略一致して居る、されば其差異の點はその統一の程度である。と伊賀氏は述べて居る、全く其通りであると思ふ。夢中に於ては各觀念は自動して他の觀念の支配を受け又はこれに禁制せらるゝ事はない、されば各觀念の間には殆ど統一がない、而かも夢中と雖も多少意識が存在して居る、されば多少の統一はある、只統一力が覺醒中に比して弱いと云ふのみである、即ち程度の問題である。覺中意識には時間空間の關係整然として備はり、因果の法またよく備つて居る、自然の法則も行はれて居るのである、然るに夢中意識にあつては、夢像に遠近の差なく、時間の觀念に乏しく因果の法が備つて居らない、小なる原因は時に大なる結果を生じ、大なる原因が小なる結果を生ずる事さへある、されど岡野氏の言によれば、夢像にも遠近の差はある因果の法則もある、たゞ時と所によつて變化するのみ、要は程度の問題のみ、覺中意識にもかゝる事はある。かの野蕃人の繪畫の如き其一例である、而かも程度と云ふ事は看過する事は出来ない、味ふべき言ではあるまいか。

吾々が日常の夢に徴して之を見るに、或種の夢にあつてはその内に現はれ来る各觀念の間



に相當の統一のある場合がある。而かも其統一の様式は覺中のそれとは趣を異にして居る時に各觀念の間に統一があるにしても其統一は弱く、又聯想は極めて急速で電光石火覺醒中殆んど推知し能はざる様な様式である。自分の調査した所によれば十八歳の一中學生は次の様な夢を見たと言つて居る。

友人の誘に應じて共に寫生旅行に出かけた、途中友人に出遇ひ、三人共に携へて自分の宅に歸り、カルタに時の移るを忘れて居つた、やゝあつて小舟に棹して天保山の沖に出で風景の美にあこがれて居ると大風あり波高く爲めに舟は覆されて思はず助けを呼ばんとした所で夢より覺めた。

右の夢に付て見るに、各觀念の間には微弱ながら統一はある、而かも覺醒中の如き確たる統一なきは勿論其聯想は實に急速で到庭推知する事は出来ない、各觀念は殆んど他の觀念の制裁を受けて居らぬ、されど最後に助けを呼ばんとした所を見れば全く他の觀念の制裁がないとは云へない、尙狼や虎の如き猛獸に追はれたる場合に之を避けんとし、己が親を盜賊などが殺さんとする場合、之に打ちかゝらんとする様な事が屢々吾々の夢に現はるゝ

を見れば意志の制裁力は其處に認めらるゝのである。

### 第三節

睡眠の直ぐ前に起つた感覺は夢に影響がある

睡眠の直ぐ前に起つた感覺の内特に激烈なるもの又は永續的のものは夢の内に現はれる材料と關係があるこの事は伊賀氏も其著「心理學原論」に説いて居る。自分は内省の結果此事實を認めて居つたが近く中學生に付て調査した結果愈々其事實の眞なる事を確むる事が出来た。

一中學生試験前その準備に忙しく、夜十一時頃まで机に向つて讀書して居つた、更ぐるにつれて眠を催し机にもたれたるまゝ眠つてしまつた、突然自分の室が一面の火に化したと思ひ驚き醒むれば、彼がすは火事よと驚いて立ち上らんとせし際に机上のラムプを覆しあはや大火を起さんとする所であつたと云つて居る。思ふに彼は其眠る前に机上にありしラムプを氣にして居つたに相違ない、其念はやがて彼が夢に火事となつて現はれて來たのである。



又十五歳の一中學生は、或夜伯母から温州密柑を貰ひその内二三個を味つた、残りの密柑を机の抽斗に入れ置いて寢に就いた、其夜彼は二回まで密柑の夢を見た、と云つて居る。又十八歳になる中學四年級の生徒は、丁度幾何の試験の前日一難問を考へつゝありしが、如何しても解けない、そのまゝ就眠したがやがて夢中に其問題が現はれて來た。而かも覺醒中解けなかつた問題が夢中に於ては容易に解けた、あな嬉しやと思はず叫んだと思へば、早や眠より醒めて身は今の夢を不思議に思ひ、現實か夢かと繰り返しつゝ床を離れて机に向ひ再び前の難問を試みしに數分ならずして、解く事が出來た。此事ありしより自分は夢に創作の力ある事を深く信じて居ると云つて居る。

右の夢に付て見れば、睡眠前の感覺が夢の内に現はれ來る材料と關係あるのみならず、夢に一種創作力ある事を示して居る、此夢の創作の有無に關しては學者によつて其說一でない。ベルグソンの如き夢に創作の力なしと云つて居る、この事に關しては章を改めて説く考である。

二品法親王覺助

思ひ寢の夢は暫しの契にて覺めての後のなぐさめぞなき

小野小町

思ひつゝぬればや人の見えつ覽夢としりせば醒めざらましを

#### 第四章 夢的生活の特色

一 夢中には運動的反應が殆んどない

吾々は夢中にて手足が運動する如く、突然空中に牽き上げらるゝ如く、地獄に墜つるが如く、又は言語を發したる如く思ふけれ共、實際は運動的反應は殆んどないと云つてもよい。夢中で空を飛び廻り又は舟を漕いだりする事があつても、實際は運動して居ない、勿論余の内省の結果並びに學生に付て調査した所によれば、多少筋肉の運動は時に認め得ないでもないされど、筋肉は恰かも麻痺して居る様なものである。而かも前言の如く一二の微弱なる軀幹運動や四肢の運動は多少認めらるゝ、かの發汗の如き反射運が吾々の夢中に現はるゝは人のよく知る所である。



ベルクソン氏は其著「デウリーム」に「クランス氏が夢中美人の像と思はるゝ方へ手を延ばしたるに覺醒後果して手が出ておつた」と云ふ事實を擧げておる。

讀人 知らず

うたゝねにはかなく人を夢に見て現にさへも落つる涙か

中 臣 祐 親

あふと見る夢は覺めぬる轉た寢に残るぞ袖の泪なりける

### 二夢は忽ち忘却さるゝ事

「覺めて五分間もすれど忘却するが普通である」とは伊賀氏の言である、吾々が曉近く眠より覺めて昨夜見し夢物語をせんものと起き上げばはや何處へやら忘れてしまつて再記する事の出来ない様な事はよく經驗する所である、試みに中學二年級九十六名に付て調査した結果は、九十六名中二名は今まで一度も夢みた事はないと云つて居つた、思ふに彼等二名はこの第二の性質を極端に發揮した者であると解するより外に道はない、彼等は夢みざるにあらずして忘却したのである、彼等は夢に興味なきのみならず、夢に付て一言も語り得

ないのである。

而かも覺醒后直ちに忘却して、夢中何か浮動したとさへ思はぬ程の者は極めて稀である、されば九十六名中九十四名までの者は彼等の夢に付て種々有益なる材料を余に與へてくれたのである。

何れにせよ、吾々の夢に關する記憶は極めて不確實であるされば夢みざりしと思ふ時にも實際は之を忘却した様な場合がないとは云へない、ある學者が吾々は終夜夢むもので夢みざるが如く思ふは之を忘却せる爲であると云つて居る、味ふべき言ではあるまいか。

三 一般に遠近の差なく、歲月の別なく小なる原因は大なる結果を生じ、大なる原因が小なる結果を生ずる様な場合がある、時間空間の關係、因果の法則共に覺醒中の如くに整然として居らない。

四 三の理由によつて夢中に於ける思想の排列は、奇異である、順序がない、而かも夢中に於てはこの誤を看破する事は出来ない。

五 能力は弛緩し、身体活動、怒力共に消失すれ共、夢中に情緒の存在するを認む、即ち



恐怖、羞恥、失望、忿怒、嫉妬、などの存存を認むるのである（岡野氏の言参考）

### 六 夢中思想は強烈で、印像的である

眠れる脳は感じにくい、而し興奮が皮質に到れば其結果は刺戟の強さに比例しないものである、恰も活動中の脳の一部が貯へられたる勢力の不活動の部を呑み盡す趣がある、夢中光景は一群になつて来る、意識は厚さを持たぬ、刺戟を受けた脳の一部は空地である、皮質の大部分は静止して居る、かく意識の部分が少い爲めに夢中の事件を吾々の過去の材料と比較する事は不當である、（ベルグソンデウリウムより）

### 七 夢に創作の力ありや

自分が内省の結果はこの夢に創作の力ありこの事を否認する事は出来ない、中學四年級七十名に付て調査せし時の如き、其三人までが夢に創作力ありこの事を證するに足る様な種類の夢を見て居る、或者は夢中幾何の問題を解き得たと云ひ、或者は歌を作つたと云つて居る、此種の例は古今其例に乏しくない、されど一代の學者ベルグソンは夢は何物も創作せぬ

と斷言して居る。

### 八 夢の徵候學上の價值

ベルグソン氏は其著『デウリウム』に掲ぐる所によれば喉頭加答兒や扁桃腺加答兒を病める者はその經驗より喉が痛み又は鳴る様な苦しき夢に襲はるゝ事がある、一旦醒むれば些少の痛をも感じなければ、鳴り音もない、而かもやがて數時間の後には實際に痛みを發する事がある、癲癇の如きもこの例である、アーテイグネス氏は醫學上より見て、夢の徵候學上の價值に付て論文を草したこの事である、かくて彼等は夢を或種の病氣の診斷上に用ひんとしたのであると、吾々も亦この方面に向つて研究の歩を進むる機の一日も早からん事を祈つて居る。

### 九 一旦醒めたる夢の續きを見る事

一度夢に驚かされて醒めたる者が一旦床を離れ、便所などに行つた後で再び床に入り、まごろむともなきに早や前見し夢の續きを見る場合がある、自分の經驗によると、夢中で郷



里の小學校で催されし卒業生同窓會へ出席した、一度醒めて家内の者に右の夢物語をなし、又眠ることも知らざるに身は再び郷里の小學校にあつた、再び醒めて思はず不思議の念にうたれたのであつた、かゝる事は獨り自分のみならず多數の者と亦よく經驗すると云ふ事實を近頃確め得たのである。

今これが研究をなすに當つて、便宜上古屋鉄石氏の「催眠術と記憶」と題する一節の大意を左に抄録する事とした。

『暗示に感應して種々の事をなしたる催民者は其暗示的命令を遂行しつゝある當時にあつては勿論尙其覺醒して後に於ても催眠中のことを一切記憶して居らない而かも其の被術者を再び催眠状態となして、前の催眠状態中の事を聞けば、明かに其事を記憶して居る、又覺醒中の時の事を催眠中に想ひ出し得る事もある、時には全く忘れて居つた覺醒時中の事を催眠状態中に於て悉く想ひ出す事さへ有る、又睡眠中の夢を覺むると共に、全く忘れてしまつて居つた者が、其者を催眠状態となすや、其夢の有様が一々明瞭に現はれた事があつた』と云つて居る。

吾々が一旦夢より醒めて再びその夢に入るは幾分か右の様な様式によるのではあるまいか、少くもある夢より醒めて再び眠つた時に前夢みし時と全じ外圍の刺戟に接し、全じ精神状態が再現する時に於ては自然前の夢に入るに相違ない、時には夢中思想が強烈で印像的である爲めに前見し夢の觀念が頑固に殘留する爲め、一種幻覺的に其續きを見る事もあらん、又は夢と現實を混合して夢と思ひし事が現實なりし事も亦なしとは云へない、而かもかゝる事實のある事は否認する事は出来ない。

夢李白二首

杜 甫

死別已 <sub>レ</sub> 吞聲	生別常惻惻	江南瘴癘地	逐客 <sub>ニ</sub> 無消息 <sub>一</sub>
故人入 <sub>ニ</sub> 我夢 <sub>一</sub>	明 <sub>ニ</sub> 我長相憶 <sub>一</sub>	恐非 <sub>ニ</sub> 平生魂 <sub>一</sub>	路遠不 <sub>レ</sub> 可 <sub>レ</sub> 測
魂來楓林青	魂返關塞黑	君今在 <sub>ニ</sub> 羅網 <sub>一</sub>	何以有 <sub>ニ</sub> 羽翼 <sub>一</sub>
落月滿 <sub>ニ</sub> 屋梁 <sub>一</sub>	猶疑 <sub>レ</sub> 照 <sub>ニ</sub> 顏色 <sub>一</sub>	水深波浪濤	無 <sub>レ</sub> 使 <sub>下</sub> 蛟龍得 <sub>上</sub>

浮雲終日行 遊子久不至 三夜頻夢君 情親見君意



告<sub>レ</sub>歸常局促

苦道來不<sub>レ</sub>易

江湖多<sub>二</sub>風波<sub>一</sub>

舟楫恐<sub>二</sub>失墜<sub>一</sub>

出<sub>レ</sub>門搔<sub>二</sub>白首<sub>一</sub>

苦負<sub>二</sub>平生志<sub>一</sub>

冠蓋滿<sub>二</sub>京華<sub>一</sub>

斯人獨顛顛

孰云網恢恢

將<sub>レ</sub>老身反累

千秋萬歲名

寂寞身後事

權中納言實清

別れしはつらきながらの面影や

強ひて又ねの夢に見ぬらん

寶篋院贈左大臣

鐘の音に逢ふと見えつる夢さめて

來ぬ人にさへ別れぬる哉

式部郷恒明親王

はかなくも猶覺めやらで慕ふ哉

見果てざりつる夢の名残を

前大納言爲氏

世の中はみるにつけても頼まれぬ

昨日の夢もけふの現も

權中納言公雄

人はよも人に語らじありし夜の

夢を夢とも思ひ出でずば

### 第五章 夢と色

夢幻に色なしとは一般に心理學者の云ふ所である、而かも自分が中學二年級九十六名に付て親しく調査した場合の如き、彼等の大多數は夢幻にも色はあると答へたのである、其後四年級七十名に付て調査した時にも全じ結果を得たのである、而かも夢中の色は現實の色と合致してゐない場合もある、全く異なつた色が現はれて來る場合も珍らしくない、されど夢幻に色のある事は今や否認する事は出來ない、ブラングリー氏は其著『デウリーム、アンドゼアインターブリテイション』に次の様な事を云つて居る『吾々は時に衣服の夢を見る事がある、其時若し衣服の色が白く見ゆれば、其人は企つる事悉く成功する兆である、綠



色に見ゆれば旅行をする兆である、青色に見ゆれば幸福多く紅色に見ゆれば幸不幸人によつて全じからず。』

彼は夢幻に白緑青紅等の色が現れ来る事を認めて居る、時には吾々が一旦夢から覺めて后種々の色を夢中に現はれたる事物と聯想して赤く見え青く見えた様に思ふ場合も少くないのである、夢と色に關しては尙研究の餘地がある、要はたゞ夢幻に色なしとは云へないと思ふ事を一言したいと思ふ。

## 第六章 夢と年齢並びに其境遇との關係

人により夢像の多きあり、又少きがある、これ其人の性質にもよるけれ共、一般に女子少年神經過敏の人は多く、之と反對の人は前者に比して少きが普通である、今夢と年齢との關係を述べんとするに當つて、その心の發達の模様を簡単に合せ述ぶる必要があると思ふ、今便宜小原又一氏の説に従つて乳兒、幼兒、兒童、少年の四期に分つて其夢を研究する事とした。

### 一 乳兒期の夢

初生より乳齒の發生するまで凡そ一年間を乳兒期と云ふ、この期間の生活は主として身体的で而かも多く本能的である尙記憶像は極めて貧弱である、されば此期に於ては彼等は夢みる事は稀である、或學者の如き嬰兒が初めて夢みるは生后四五ヶ月の後であると云つて居る。

### 二 幼兒期の夢

乳齒の發生より脱落まで、即ち一歳より六七歳まで、腦髓の容積はこの時期の終に於て殆んど全量に達すると云はれて居る、注意力は尙散慢で確實な觀念を得ない、されば此期に於ける幼兒の夢はなほ散慢で纏りが無い、自分の友人に五歳の女兒がある、一日『とつちやん夢を見た』と泣きながら床を離れた、早速『どんな夢を見たか』とすかさず尋ねたのであつた、たゞ怖ろしい夢を見たとのみで要領を得なかつたと云つて居つた、かくて夢みる事が稀であると共に、夢に關して興味を持つて居らない、されば一旦見たる夢もどこへやら忘れてしまふのである、自分は五歳乃至七歳の幼兒に付て種々調査したのであるが、



彼等は一般に夢に興味を持つて居らないのみならず、彼等の或者は夢に關して何物も語り得なかつた、否語り得ない者の方が多くあつたのである。

### 三兒童期の夢

六七歳より十四五歳まで即ち小學教育時代である、この時期には記憶は最も強盛で、心的現象は大に發達する、従つて兒童は夢に對してやゝ興味を持つに至り、末期に至れば稍纏まつた夢を見るに至るのである、而かも彼等の夢は極めて無稚氣なるもので時に戦争ごつこの夢を見ては喜び、走歩競走の夢を見ては勇みたつのである。

今和氣小學校に依頼して今校の兒童に付て調査したる結果を左に掲ぐる事にした、参考に、なれば仕合である此調査は大正六年二月一日に行つたので、其方法は『昨夜どんな夢を見たか』と云ふ問に對し各自に口答で語らしめたのである、而かも一人づゝに付て調査したのであるから兒童は必ずや眞實を語つて居るに相違ない。

#### ○尋常科第一學年 男三十九人

三十九人中全く夢みざりし者三十人、夢みたる者九人

1 電車道の側に乞食が居つた、其側には堀があつて鯉が澤山遊びで居つた、その乞食が大きな石を持つて追かけて來た、逃げんごした際石につまづいて倒れんごした所で目が醒めた。

2 隣家に火事があつた。

3 狸が嫁入すとして人力車に乗り提灯に火を點じて新道を走り行くを面白く眺めて居つた

4 友人の家が焼け出した、消防夫が澤山集まつて來た、ポンプの音に目を醒された。

5 隣の赤ん坊が何時までも泣て居る、漸く泣きやんだと思ふと目が醒めた。

6 犬に吠まれた。

7 車夫が橋の上から河の中へ墜落した。

8 友人と凧を揚げて居ると、突然友人の凧の糸が切れて凧は遠く飛んでしまつた、急ぎ凧の後を走り行く内橋なき川に落ち込んだ所で目が醒めた。

9 山へ遊びに行つた。

#### ○尋常科第一學年 女四十一人



夢を見たる者は二十人あつた。然も其内十四人は忘れてしまつて語る事が出来なかつた。

- 1 清書をして居ると、半紙に墨汁が落ちて泣き出した所で目が醒めた（此夢を見たる者が二人あつた）
- 2 伯母さんがお嫁に行く所。
- 3 友達と二人で山へ遊びに行つて居ると、大きな蜘蛛に襲はれて逃げようと思つても逃げられない目がさめて后身体一面に汗が出て居つた。
- 4 友達が病氣に罹つて困つて居る所。
- 5 先生の宅へ行つてお菓子を貰つた。

○尋常科二學年生 男二十七人

夢を見たる者 七人

- 1 獨逸と戦争をして、敵を降参せしめ多數の捕虜を得た。
- 2 近所の人々が互に戦争をして殺し合つて居る所。
- 3 兒童が數人寄り集つて萬歳踊をしておる。

4 盜賊が二階から入り來つて自分の着物を盗み去つた。

5 女の幽靈に出遇つた。

6 風呂よりの歸途犬にはへつかれた。

7 馬に乗つて戦争に出かけた。

○尋常科第二學年 女十八人

夢を見たる者 四人

- 1 母が病死して大變泣き悲しんだ、而かも弟は平氣で笑つて居つた。
- 2 妹が死んで泣き悲しんで居るとやがて蘇生して我を忘れて喜んだ。
- 3 伯母様に連られて道後へ行つた。
- 4 姉さんと二人で近くの店へ買物に行つた。

○尋常科第三學年 男二十三人

夢を見たる者 六人

- 1 母が突然なくなつた。



- 2 馬車を牽いて居る馬があばれ初めて馬車は數人の客を乗せたる儘河の中へ墜落した。
- 3 自分の家が焼けた。
- 4 飛行機に乗つて空中を自由にかけ廻つた。
- 5 空氣銃を買つて貰つて、友人と共に銃をかついで山へ遊びに行つた。
- 6 同級生と喧嘩して先生に叱られた。

○尋常科第三學年 女十二人

夢を見たる者 七人

- 1 牛に突かれて頭へ大きな傷を負ふた。(二人)
- 2 自分の茶碗を破つて母に叱られた。
- 3 父が突然病死した。
- 4 犬に咬まれて泣き出した。
- 5 姉が御嫁に行つた。
- 6 母が自分等を殘して何處ともなく家出してしまった。

○尋常科第四學年 男四十二名

夢を見たる者 六人 (尙見たけれ共忘れてしまつたと云ふ者十一人)

- 1 飛行機に乗つた。
- 2 空氣銃で鴨を獲つた。
- 3 友人を河の中へつき落した。
- 4 父に連れられて山へ狩に行つた。
- 5 偽つて『火事だ』と云ふと大勢の人が手に手に鳶口を持つて集つて來た、自分は恐ろしくなつて逃げんとする所を巡查に捕へられた。
- 6 火事だと云ふ聲に驚かされて急ぎ出て見れば遙かに遠方に當つて空が赤くなつて居つた。

○尋常科第四學年 女三十三人

夢を見たる者 九人

- 1 お友達の方が今度除隊になつて歸つて來た、近所の娘と見合をして居る所を垣の蔭が



らぬすみ見た。

2 久てく病氣の爲め欠席して居つた友達が再び登校し初めたので共に楽しく唱歌等歌つて遊んだ。

3 友達と一緒になつて家族合せなどして遊んだ。

4 去年の夏既に死んだ筈のお友達と二人して道後公園の雪の景色を眺めた。

5 母の命によつて、近所へお使に行つて歸り途懐中にあつた錢を悉く鬚のある男に奪はれた。

6 遊戯中過つてお友達に大負傷をさせて大變心配した。

7 行衛不明になつておつた、母の愛猫が何處とも知れず歸つて來たので母と共に喜んだ。

8 裁縫の時間に尺を忘れて先生に叱られた。

9 裁縫の時間に先生から賞めて貰つた。

○尋常科第五學年 男三十四人

夢みたる者 十人

1 海岸に居ると遙かの沖より一隻の汽船が黒煙を吐いてだん／＼進んで來る、港に入つて見れば其船の船長は自分の伯父さんで有つた、早速その伯父に連れられて松山へ行つた、城山へ登つて天主閣上から四方を眺むれば仲々よい景色である、城山を下りて町に出づると一人の兵士に出遇つた、自分は擧手の禮をしたけれ共彼は答禮しなかつた、失敬など思つたから、いきなりその兵士に飛びかゝらんとした所で目が醒めた。

2 父に連れられて密柑畑へ行つた、父は自分に温州密柑を呉れた、早速皮を取り除けて味つたと思ひきや右手の指を咬んだので其痛に目が醒めた。(以下畧)

○尋常科第五學年 女二十五人

夢を見たる者 八人 (便宜上二つ丈掲ぐる事にした)

1 お友達が今度女學校の入學試験に應ずると云つて先生から毎日特に算術や讀方を教つて居る、その教室の外であまり大きな聲をしたと云つて先生からお目玉を頂戴した。

2 裁縫の時間に妹のエブロンを縫ふて居ると、隣りに座な占めて居つたお友達がそれにイソク汁をかけて、自分は泣き出した。



## ○尋常科第六學年 男二十一名

夢を見たる者 三人 (尙忘れたと云つて居る者五人)

1 今度愈々卒業すると云ふので記念撮影の際、思はず眼を閉じた時寫眞屋が寫したので残念でたまらなかつた。

2 放果後農事の手傳をして居ると、牛が走つて来て自分の眼のあたりを的にやつて来る、逃んとしても足が動かない、醒めて見ると身体一面に冷汗が出て居つた。

3 友人の葬式の模様がそのまゝ、明瞭に夢に現はれた。

## ○尋常科第六學年 女二十九人

夢を見たる者 十名 (便宜六人分を掲ぐる事にした)

1 母が玉の様な男子を分婉した。

2 記念撮影の際笑つて先生に叱られた。

3 下女が郷里へ行つた儘歸つて來ない、自分は下女に代つて毎日子守をした。

4 修學旅行に行つた。

5 登校の途中十錢銀貨を拾ひ、之を巡査に届けんものと巡査駐在所へ行つて、右の銀貨を巡査に渡すと巡査は自分の顔を見て、ニヤリと笑つた、と思ふと目が醒めた。

6 記念撮影の時外來の人が澤山あつたので恥かしかつた。

## ○高等科第一學年 男女 二十三人

夢を見たる者 十三人 (便宜三人分を掲ぐる事とした)

1 友人が互に喧嘩して居る所を傍觀して居つた。

2 蛇に追つかけられ逃げんとして能はず大變苦しんだ、最後に蛇に咬まれんとして目が醒めた、足に帯がまとい着いて居つた。

3 母が病死した父は四十九日の法會もすまない内から後妻を貰ふと云つて、亡き母上の事なんか全く念頭にない様子である、自分は悔しくてくたまらない、思はずワット泣き出した時に目が醒めた、醒めて見れば母上は健在、母上が病死したことは全く夢であつた事が別つて嬉しくてく、其夜は眠られぬ程であつた。

## ○高等科第二學年 男女 二十八人



夢を見たる者 十三人 (便宜四人分を掲ぐる事とした)

1 裁縫室にある籠臺を二つ並べてその上に座つ居ると先生が入つて來られて、先生にひごく叱られた。

2 入院中の母、病癒えて愈今日は退院と聞き妹を連れて松山市の町はづれまで迎へに行つた。

3 女學校の入學試験を受けに行つて、算術の時間に一問も解く事が出来ない、残念でくでたまらない、聲をあげて泣き出した時目が醒めた。

4 師範學校の入學試験に應じ一次試験には首尾よく合格したるに、二次試験の場合に馳足をやる時に際して、心ばかりはやつても足が一寸も動かないかくして苦しむ内に目が醒めた。

尋常科第一學年より高等科第二學年に至るまで各級共に夢みたる者が其全生徒數に比して、割合に少きは、自ら夢みないと思つてゐる者の内にも或は忘却したる者もある事と思ふ、尙彼等は無雅氣なる生活の傍かく夢なき熟睡を樂む者と見る事も出来る、男女によつて自

ら其夢に一種の趣を帶び、學年の進むに従つて、次第に變化する様は、いと面白い現象であると思ふ。

夢親

細井徳民

芳艸萋萋日日新

動人歸思不勝春

郷關此去三千里

昨夢高堂三調老親

### 四少年期の夢

十四五歳より二十歳頃まで即中等教育時代で此時期には思考力が強盛になり、時に空想に馳せる事がある、尙此時期の末に至れば、春機發動期に達し、夢と時に性的方面に走り、異性の夢に襲はれて、早曉の疲勞を覺ゆる様な事もある。

注意すべきは、この期の夢的生活である、小泉氏は十四五歳より二十歳までを少年期と稱へて居るけれ共、此時期の未は俗に云ふ青年期である、ホール氏は青年期は第二の誕生であると云つて居る、げに青年期は人生の變化最も多き時期である、沈思冥想は春機發動期



に於て著しき心的特色である、何人も青年期に於て沈思冥想に耽る結果、時に現實の世界を離れて遠く空想界に遊ぶ事がある、かゝる心的傾向は時に二重人格、又は二重意識の現象を現す事もある。

ホール氏がこの青年期の夢に關する研究の大意を掲ぐれば、『青年期に於ては沈思冥想に耽る結果この現實の世界を離れて遠く空想界に遊ぶものである、而して強壯健全の者は容易に又現實の世界に歸る事が出来るけれ共虚弱なる青年は此復歸力が頗る遲鈍であつて、永く空想夢幻の間に彷徨して止まない、此心的傾向は青年期の夢的生活に影響を來すものであるされば青年期の初は其夢中生活が感情的で、一旦夢から醒めた後も、其者の性向上に影響を及ぼす事が大である、かくて彼等は夢に興味を抱く事深く、逢ふと見て覺むる現のつらさにも、こりすや夢を猶頼むらん（平宣時朝臣）夢を頼む傾向がある、睡遊病の如きも此時期に多く發生するものである。

起きもせず寝もせず明す床の上に夢ともなしの人の面影（前大納言公蔭）とも云ふべき睡眠と覺醒の中間状態に陥る事が屢々ある、時としては夢の強烈なるが爲め、その夢中に現はれたる事物現象が何時までも残つて忘れられない、又は嘗て注意を惹いた事のない異性の或人の夢を見て強烈なる情を以て覺むる事もある』とかの現實生活が夢中生活にまで浸入する、即ち現實生活の延長とも云ふべき、日中起りし事柄が其夜の夢に現はるゝも此時期に多い、かゝる時には彼等は夢みたる結果非常に疲労するが常である。

自分は此時期の夢を實驗的に調査するに當つて、中學一年生より四年生に亘る約三百名の生徒に付て之が調査をなす事とした、而かも中學一年生は此期の初期に相當して居るから特に中學一年生の夢として離して研究する事とし、二年生以上は之を一團として研究する事とした。

### 中學校、一年生の夢

九十五人の生徒に付て調査したのであるが、其方法は『昨夜如何なる夢を見たか』と云ふ問に對して豫め與へ置きたる紙に、無記名にて答案を書かしたものである、彼等の内夢みざりし者は僅かに十一人であつた今彼等の夢を通觀するに、一般に無雅氣である、子供らしい處がある。



## 1 火事の夢

丁度自分が調査したのは舊曆正月三日の朝であつたその前日學校所在地のごあるネル會社から發火して一場の火事を起したのである、此が彼等の腦裡に彷徨せしものか火事の夢を見たる者が七名あつた、現生活の延長はこゝにも現はれて居る。

## 2 正月ご關係のある夢

此種の夢を見た者も多數あつた、カルタ遊びの夢を見た者三、親戚の宅を訪れて御馳走を受けたる夢を見た者二、凧を掲げた夢を見た者三、と云ふ數を示して居る。

## 3 寒稽古に關する夢

此種の夢を見た者が七人あつた、寒稽古は一月八日より開始されて、舊曆一月三日と云へば、其最も盛んなる時期であつた、一年生にして寒稽古に日々出席して居る者は約二十五人であつた、二十五人中七人はこの夢を見たのである、或者是寒稽古に出席したるため、頓に技術が上達して先生から賞められた夢を見たと云ひ、枕元に用意して置いた竹刀がなくなつて今日は稽古が出来ないと、残念に思つて居ると、やがて竹刀が空中から飛んで來

た夢を見たと云つて居る者もあつた、要するに此種の夢を見た者が七人の多數に達して居る事も亦面白い現象である。

## 4 故郷の夢

一度故郷を後にして寄宿舎の人となつた場合、故郷を想ふ念は益々強くなつて、終に家庭病に罹り、故郷の夢が頻りに襲ふて來る様な事はよく人の經驗する所である、一年生には十一人の寄宿舎生がある、尙町に下宿して通學して居る者又十人を下らない、かくて時恰も舊曆正月三日に相當せし故か、或は故郷に歸つて小學時代の友人と楽しく遊んだ夢、父に連れられて氏神に參詣したる夢兄妹と共に楽しく雜煮を味つて居ると點呼の鐘に驚かされて夢から醒めたと云つておる者、此種の夢を見た者が五人あつた、思ふに彼等は寄宿舎生又は下宿生に相違ない。

## 5 試験に關する夢

多くは試験の成績不良なるを心配して居る夢である、此種の夢を見た者が六人あつた、彼等は其成績不良なるを憂ふる結果かゝる夢に襲はるゝのであらふ。



### 6 山に關する夢

登山の習慣は近來學生間に漲つて居る様に思ふ、彼等も亦此例に漏れず、登山の夢を見た者又四人。

### 7 盜賊の夢

兒童は一般に盜賊を恐ろしい者と考へて居る、彼等は賊に切りつけられ、逃れんとして能はずあはや殺されんとする時に夢より醒めたと云ひ、教科書を悉く賊に掠められて泣き出した所で醒めたと云つて居る、かくて此種の夢を見た者亦四人。

### 8 動物、鳥類、蟲類の夢

虎、象、牛、馬の夢を見た者各一人にして、蛇の夢を見た者三人、鶯の夢を見た者二人にして、毛蟲に惱んだ夢を見た者が一人あつた。

### 9 飛行機の夢

或は飛行機に乗つて空中を飛び廻り、飛行船に乗つて世界旅行をなす等、此種の夢を見た者四人。

### 10 旅行に關する夢

修學旅行の夢を見た者二人、東京見物に出かけたる夢を見た者、松山方面へ夢中で遊んだ者各一人。

### 11 自轉車の夢

自轉車で通學して居る者が約十二三名ある、自轉車で登校の途中、鎖か切斷されて遅刻した夢、自轉車を買つて貰つて、得意氣に乗り廻つた夢、其種類は一々掲ぐる事は出来なけれ共此種の夢を見た者が五人あつた。

### 12 錢の夢

百圓紙幣が一枚氷にはり詰められて居つた、やれ嬉しやと、氷を割つて取り出さんとせし所で夢より醒めた而かも蒲團の綻目より綿のはみ出し居るに氣が付いたと云つて居る生徒もあれば、拾圓紙幣を手にして使に行く途中何時の間にか、それを失つて泣き出した所で夢より醒めたと告白して居る者もあつた、かくて金錢の夢を見た者が三人。

### 13 其他の夢



靴屋、友人の葬式、父の死、姉の嫁入、亡き友との會話、洪水の爲め溺死せんとせし友を助けんとして己も溺死せんとせし所、此等の夢を見たる者各一人、かく擧げ來れば種々面白いものが有る。

### 中學生の夢

(二年生より四年生に至る百七十人)

調査の方法は一年生の場合と同一である、彼等の夢は一年生のそれと、それを比較するに其趣が變つて居る而かも共通なる夢が多く、其種類は次の様である。

#### 1 一動物の夢

狼に襲はれ『母と』呼ばんとして聲出せず(醒后胸に手あり)虎に襲はれて足を咬まれ、手にある魚類を猫に奪はれ、猿が澤山走つて居る所へ山犬が現はれたる夢を見たる者各一人乃至三人。

#### 2 蟲類

蛇、毛蟲、蜘蛛、蜂等が彼等の夢に現はれて居る。

#### 3 其他の夢

海に釣して大魚を獲、母に死別して泣き(醒后涙出て居つた)空氣銃を持つて小鳥を追ひ廻し、身に二枚の翼生じて自由に空を飛び廻り、天井から落ち(此夢を見たる者は二十三人の多數に達して居つた、夜分眠らんとして眠られず、轉寢などして居る時によくかゝる夢を見ると云つて居る)賊に襲はれ逃げんとしても足意に従はず、苦しんで居ると、身は空中に舞ひ上りたる夢の如き、數へ來れば仲々澤山ある。

尙停學を命せられ、遅刻し、教師に叱られ、大掃除をなし、寒稽古に皆勤して賞を得、何回教室へ入るも算術の時間のみにて苦しめられ、金牌の賞を得たる如き學校に關する夢も多く現はれて居る。

又香料、菓子、密柑、火事、金錢、幽靈の夢に付ては特に語るべき程の事はなけれ共夢に小便を催し、醒后床の上に小便を漏らし居るを發見せし如き、二階より墜落したる夢より醒めて、足か炬燵の上より落ちたるに氣付ける如き共に面白いと思ふ。

墓より日の玉が出で、女が頭上に火を點して氏神に詣りし夢の如き不可思議なるものもあつた年若き女が紳士と手をとつて公園内の猿に興じて居る様、新婚旅行、見合等の如き稍



性的傾向を有するものもあつた。

彼等の内二三の者は時に異性の或人を夢み強烈なる情を持つて醒めたる事も度々あつたと云つて居るかゝる時に夢中に現はれたる事物が長く残つて忘れられない事のあるはよく吾々か青年時代に経験する所である。

以上は夢と年齢の関係を畧述し之に自分の調査した結果を併せ記したのであるが、獨り年齢のみならず夢像の性質は其人の経験によつて大に異なるものである即生來の盲者は祝覺の夢なく、生來の聾者は聽覺の夢が全くない。

七〇

高階成兼

思ひ寝のまくらにみえし面影は

夢としりても猶ぞ戀しき

大藏郷隆博

忘ればやはかなき夢の名残ゆる

今朝の枕にのこる面影

讀人しらす

夢よりも覺めての後の侘しきは

つらき現に惑ふなりけり

左近中將公衡

昨日見し夢かこそ思ふ寢覺して

昔をしのぶあかつきの空

## 第七章 幻覺

夢に未稍的のものと、中心的のものとの二種あると論じて居る學者も少くない、松本亦太郎氏の如き夢幻に以上の二種類ある事を論じて居る、中心的夢幻は睡眠中に於ける幻覺であると思ふ、かく見れば幻覺と夢は離るべからざる關係がある、抑も幻覺とは中樞外の刺戟をまたず、皮質中樞の刺戟に因りて生ずる複雑なる感覺で健全感覺と同一の明度を有して居る、その錯覺と異なる所は前者は外界刺戟を必要とするけれ共、后者には外界刺戟の必要がない、幻覺には幻視幻聽幻味幻觸内臟幻覺運動幻覺混合幻覺等の種類があるか

七一



る感覺質の異常を發するは、隠れん坊をしてし居る子供、逃亡して未だ縛に就かぬ罪人、情夫と密會を約せる婦人、恐怖心強き者等に多いのである、尙其原因は多く精神異常から來るけれ共、幻覺の如きは手淫、婦人の生殖器病に基く事か最も多いと醫家は云つて居る、今荒木蒼太郎氏の精神病學講義より幻視及び運動幻覺の二者を抜いて紹介すれば。

### 幻 視

火焰、山水、人物、動物、天人自体像等がよく現はれて來る、而して物体に色なく又は甚だ複雑な色彩を有し扁平に厚さを具ふる實體となりて見ゆる事もある、透視せらる事あり背後に物体を幻視する事もある、尙幻覺は夜間又は暗所に多く發する、

### 運動幻覺

其性明ならず、手足が自由に運動する如く感ずる事あり、空中に引きあげらるゝ如く地獄に墜つる如く、又は言語を發したる如き感をなす事がある、夜間の刺戟に原因する未節亢奮は大脳中樞に對して記憶像の活動を促すに至る、これが感覺である而かも幻覺も亦一種の感覺なれ共后者は外界の刺戟を要しない、生理上病理上の中樞内刺戟に因りて直ちに

記憶像を亢奮し之を外界に投射するのである、されば生來の盲者は視記憶像を有せざれば幻視を發せず生來の聾者は聽記憶像なければ幻聽を發しない、又皮質慢性變質に因つてすでに記憶像を失へる者も幻覺を發する事はない、夢と幻覺、否夢即ち幻覺の研究は實に興味ある問題である。

源 和 義 朝 臣

烏玉のよる見る夢を夢ごのみ

思ふ心ぞいやはかなゝる

中務卿宗尊親王

梅が香の身にしむ床は夢ならで

寢ぬ夜霞める月を見る哉

## 第八章 睡遊 夢魔及び寢言

### 第一節 睡遊 (遊魂症)

睡遊は夢の研究上之を度外視する事は出來ない、かの精神病者は其病一旦癒ゆれば多く病



中の事を記憶してゐない、醫家は之を記憶缺損と云つて居る、又この記憶缺損を發する諸症を精神朦朧状態と云ひ、夜中精神朦朧状態を發して突然床より走り出で、又は諸處を徘徊する事がある之を睡遊又は遊魂症と云ふ、小兒が冬寒き夜など炬燵で桃太郎の話などしつゝ何時しか眠ると見るまゝに、突然起き上り壁に向つて何か求むる様な態度に出づる事がある、これ精神朦朧状態に陥つたのである、睡遊に陥つたのである、其物音に驚かされて起き上りたる母親が我兒の舉動に不審を抱いて、注意を促せば其の兒童は再び覺醒状態に復するけれ共、自己のなしたる事は全く記憶して居らない、かの睡眠中の歩行の如き亦一種の夢に過ぎぬ、夢と異なるは只限度を一寸越えたるのみ、彼等は夢に驚かされてかゝる舉動に出づる事もある、さて夢中の像にのみ應接して、外界の刺戟に應接せぬから、睡遊中の事を記憶して居らないのである。

睡遊は實に睡眠と覺醒の中間状態である、一見全く意識の拘束を受けない様な種々の活動をなす、而かも覺醒時の如く刺戟に對する反應が全く無い、されば覺醒するに及んで其睡遊中に爲したる事に關しては毫も之を再生する能力なきは前に述べたる通りである、睡遊

は自己誘導なる事あり、自發的なる事あり、又特發的なる事もある、時には催眠状態の失神状態に於ける様に適宜に之を誘引する事も出来る、極めて深き催眠状態は睡遊状態である、この状態に至れば被術者は殆んど全く麻痺の状態に陥り、其舉動に於て又感覺に於て、命令通りになる、而かも一旦覺醒に至れば催眠中にありし事を全く記憶しないが普通である、前者にありては他人よりの暗示なくして、自らあらゆる事をなすが后者にありては自動的には何等の事をも爲す事なきが普通である、(此項英文世界百科辞典參照)

#### 自分見聞した實例

余の村に十五歳、目下某市役所の給仕を奉職して居る一少年がある、彼が十四歳の秋十月の末つかた、夜中突然起き上り、戸外に走り出で、『約一町を隔てたる伯父の宅に至り、『自分の家は火事だ、早く來つて消し止めくれ』と大聲を發した、伯父なる人は此言を聞くより、取るものも取りあはず、洗足のまゝ走り出で『火事よ〜』と呼びつゝ、行つて見れど、何事もなかつた、かくする内、全じ部落の人々は火事よと叫ぶ音に驚かされて夜の十時と云ふに約三十人餘の人々は其家の廻りに集まつたのである、其少年に付て種々詰問せしに



彼は全くかゝる事を記憶して居らぬと云ひ張つたのである。

余の親戚に目下二十一歳の一青年がある、彼が未だ十二三歳の頃村の小學校に通學して居つた時代、夏暑き頃放課後よく蜻蛉つりをやつて居つた、夜に入つて床を離れ壁を撫でつゝ、蜻蛉つりの真似をなせし事一再でなかつた、と現に師範學校在學中である、尙かゝる例を挙げれば、睡遊中に放火し、自殺し、夜行する者亦少くない、この睡遊病の發生するは多く青年期の初期なる事も亦忘れてはならぬ。

## 第二節 夢 魔

夢魔は普通生理的事情によつて呼吸作用が妨害せらるゝ爲めに起るものである、余の調査せし處によれば夢魔に關する答案三十通を得たる内二十五通までは呼吸作用を妨害せられたる爲めで有つたと云つて居る、或者是胸に手を置きたる儘眠つて居つたと云ひ、他の者は窮屈なる襦袢を着たるまゝ、寝た爲めであつたと云つて居る、されど寛き衣服をまとひ呼吸作用が自由に行はるゝ時は決して夢魔に襲はるゝ如き事はない、常に夢魔に苦しむ人はたゞに精神上のみならずかゝる生理的事情に深く注意すれば再び夢魔に襲はるゝ様な事は

ないと思ふ、ベルグソン氏は其著『デウリズム』にマラクスシモン氏の夢として次の夢を載せて居る。

金貨がマ氏の兩側に高く積み上げられた、而かも其高さが全一でない、氏は如何にもして之を全じ高さにせんものと種々苦心したけれ共、其高さが揃はない、終に非常なる苦痛を感じ、夢より醒めた、時に彼の右足は敷布の折目にはまり爲めに兩足は同一平面になつた、且つ容易に之を元の位置になほす事が出来なかつたと、彼はこの足より來る刺戟を受けてかゝる夢に苦しめられたのである。

### 夢と生理的事情との關係

呼吸作用が自由に行はれて居れば、時に空中を飛行し、又は天人の夢をよく見る、夜具を頭より被り、足を屈し、又は足元に重き物を置きたる儘眠に就く時は苦しき夢をよく見る、尙喉頭加答兒に苦しむ人が喉の痛む夢を見る如き面白き現象である。

## 第三節 寢 言

吾々が精神朦朧状態に陥ると時に寢言を發する事がある、實驗の結果寢言は夢と離れない



ものであると思ふ漠々たる夢に襲はれて居る場合によく寢言を發するものである、而かも本人は如何なる事は云たか全く記憶して居らない、其間に統一がない、夢を見ない人は無けれ共寢言はすべての人の経験する所ではない、この寢言が睡遊と密接の關係ある事及び夢と等しく現實を離れないのは事實である。

春晚懷<sub>二</sub>山南<sub>一</sub>

陸 游

壯歲從<sub>レ</sub>戎不<sub>レ</sub>憶家

梁州裘馬鬪<sub>二</sub>豪華<sub>一</sub>

至<sub>レ</sub>今夜々尋<sub>二</sub>春夢<sub>一</sub>

猶在<sub>二</sub>吳園<sub>一</sub>藉<sub>二</sub>落花<sub>一</sub>

待も兼ねて稍更けにける轉寢の

夢路に通ふほどゞぎす哉

前大僧正覺圓

覺めやらぬ夢路に夢をきゝそへて

迷ひの中に猶まよふ哉

### 第九章 夢に關する傳説及び迷信

#### 第一節 夢に關する傳説

吾國は頗る傳説に富み最古の文南大に現はれたる傳説のうちにも、既に世界的のものが少くなかつたこの事である、外國文化の輸入と共に外國の傳説の輸入せられて日本化したるものも甚だ多い、次に述べんとする支那に於ける傳説と日本のそれとを比較するに此点が明かに現はれて居る。

1 支那に於ける傳説 (此項は主として故事海を參考)

#### A 文學に關係ある夢

李白<sub>二</sub>天寶遺事<sub>一</sub>に『李白少時夢<sub>二</sub>筆頭生<sub>一</sub>花。自<sub>レ</sub>是才思瞻逸』とあるこれ筆頭生花之夢として人のよく知る所である。

江淹<sub>二</sub>南史<sub>一</sub>に『江淹少時夢<sub>二</sub>人授<sub>二</sub>五色筆<sub>一</sub>由是文思日新』とある、李白の夢と共に筆に縁のある所が面白いと思ふ。



羅含||晋の羅含、五色の鳥を呑むと夢み、是より文章が頓に異なつて來た。

劉贇||梁の劉贇、金龜の文采五色なるを夢み、其后文章が大に進んだと云はれて居る。

王勃||唐の王勃、幼時人、墨を遣り袖に盈つと夢み文章が大に進んだと云はれて居る。

尹知章||尚唐の尹知章は人巨斧を持て其胸を鑿破すと夢みて驚悟し、其后思智大に開敏したとの事である。

### B 預言的意味を有する夢

黄帝||黄帝書寢して夢み、華胥の國に遊んだ、既にして覺めて怡然自得、天下大に治まる事夢みし所の華胥の如くであつたと。

穆公||秦の穆公、夢に上帝の所に至り、鈞天の廣樂を見た、帝錫ふに策を以てした、これより秦昌大であつたと云はれて居る。

高祖||唐の高祖兵を擧げたる時、身死して床下に墜ち群蜺の食ふ所と爲ると夢みた、智蒲禪師曰く、天下を得ん、群蜺の食は億兆の趨附する也と、果して天下を得たのである、其解明の巧なる事亦稱すべきものが有る。

黄帝||黄帝、大風天下の塵土を吹くと夢み、遂に風後を得て相とした、殷の高祖も亦夢みて傳説を求め得て相となし天下大に治まつたと、こは『夢風吹塵』なる句と共に人のよく知る所である。

天鷲||天鷲と云へる人、巴郡に在り三刀を懸て又一刀を益すと夢みた、主簿李毅之を解して曰く、三刀は州と爲る、又一刀を益するは明府はそれ益州に臨む手と、果して其通りであつたとの事である。

張瀘||張瀘初め岐王の属であつた、一夜緋衣を着て驢に乗ると夢みて、睡中自ら思ふに『我れ綠衣して馬に乗る何爲ぞ緋衣して驢に乗る』と其歲應試して及弟し鴻臚函と爲り、未だ考ならずして五品を授けられたと云はれて居る。

王恂||晋の王恂、『人有り大筆椽の如きものを以て我に與ふと夢み、既にして覺めて曰く、當に大手筆の事有るべしと、俄にして武帝崩じ、哀策諡文皆恂に草せしめたこの事である。

陸機||晋の陸機車畔斤を懸くと夢み、後孟政に譖せられて竟に害に遇つたと傳へられて



居る。

張瞻||張瞻、外宿して臼中に炊ぐと夢みた、王生解して曰く、君歸つて婦人を見ざらん、何となれば臼中に炊ぐはこれ釜なければなりと、歸るに際して妻が果して卒したと傳へられて居る。

孫堅||孫堅が妻月懷に入ると夢み、大に喜んで曰く子孫興らんと、彼が解明亦面白いと思ふ。

### C 字義の方面より解明をなせる夢

蔡惠||蔡惠、田中の禾穗をとり復之を失ふと夢みた郭喬郷曰く、『禾失は合すれば秩の字と爲る、則ち此夢當に祿秩を得べしと』旬日にして詔有り司徒となつたと傳へられて居る。

黃巢||黃巢嘗て李存孝と戦つた事があつた、一夜兩尾牛に騎すと夢みた、軍士之を解して曰く、『牛兩尾是れ失の字である、未だ出戦すべからず』と巢听かず、果して敗走したのである。

魏延||魏延、頭上角を生すと夢みた、解者曰く、『角の字は用の字刀字に従ふ、是れ刀下の用なり、慎むべし』と延後ち馬岱に殺されたのである。

尙書經に『夢帝賈子良弼』とあり論語に『子曰甚矣也。吾哀也。久矣吾不復夢見周公』とある又矣の丁固は松腹上に生すと夢み、人に謂て曰く、松字は十八公なり、今より十八年にして我公となるべしと、后果して言の如くであつたと傳へられて居る。

### 2 吾國に於ける傳説

吾國に於ける傳説は既に人のよく知る所なれば此所に其最も有名なるもののみを掲ぐる事とした。

後醍醐天皇||帝一夜『大樹あり南の枝茂る』と夢み給ひ、終に一代の忠臣楠正成を求めさせられたと拜聞す。

豊臣秀吉||秀吉の母一夜大陽懷に入ると夢み、其後盈みて終に一代の英雄秀吉を産んだと傳へられて居る。

藤原兼家||藤原兼家、納言たりし時、相坂の關に雪を値ふと夢み、以爲へらく是れ凶兆



也と、之を占はしめた、占者曰く、『吉なり必ず班牛を遺る者あるべし』と果して京極二條邸落宴の時に源頼光、約三十匹を牽ひて来た、既にして大江匡衡至り、之を聞いて曰く、『是れ失占也、夫れ雪は白し關にして白牛に迎ふ、公關白に墜るに非るを得ん耶』と明年果して右大臣に任せられ、終に關白に進んだと傳へられて居る、世に『夢相阪關値雪』と云ふはこの夢を指せるものである。

伊奈忠政 忠政は忠次の長子である、而して徳川氏の臣である、元和中難波の役に従つて、淀河を成り土囊を積んで、長流を斷たんとした、一夕夢に父忠次甲を帯び刀を揮ひ、忠政を諭して曰く、『天下の勝敗此一舉に有り敵火箭を放たば則ち此境破れん、宜しく防禦を嚴にして之に備ふべし』と忠政驚き覺めて其言の如くにした、敵兵大に之に困み終に忠政の勝となつたと傳へられて居る。

## 第二節 夢に關する迷信

### 第一項 吾が國に於ける迷信

夢の説種々ありと雖も列子周穆王篇に『覺に八微有り、夢に六候あり、奚ぞ八微と謂ふ、

一に曰く故、二に曰く爲、三に曰く得、四に曰く喪、五に曰く哀、六に曰く樂、七に曰く生、八に曰く死此者八微形接する所なり。奚ぞ六候と謂ふ、一に曰く正夢、二に曰く靈夢、三に曰く思夢、四に曰く寢夢、五に曰く喜夢、六に曰く懼夢、此六者は神交る所也。感變の起る所の者を識らず、事至れば則ち其の由然る所に惑ふ、其由て然る所を知れば則ち恒る所無し、一体の盈虛消息、皆天地に通ず、物類に應ず故に陰氣壯なれば則ち大水を涉て而して恐懼すと夢み陽氣壯なれば大火を涉つて而して燔爛すと夢み、陰陽俱に莊なれば生殺を夢み甚だ飽けば與ふと夢み甚だ飢れば取ると夢む、是を以て浮虚を以て疾を爲す者は則ち揚を夢み、沈實を以て疾を爲す者は則ち溺を夢み、帶を藉きて而して寢れば則ち蛇を夢む……』と其説く所は重として夢と生理的關係なれ共又以て支那人の夢に關する思想を窺ふ事が出来ると思ふ、尙周禮春官占夢の篇には『日月星辰を以て六夢の吉凶を占ふ』とあり、『又大卜三夢の法を掌る』ともある、かくて支那に於ては古來夢に多大の興味を持ち或は占夢の官を置き、占夢を職業とせる者は今も尙絶えないこの事である、此思想は獨り支那に止まらず西洋諸國に於て然り、吾國に於ても亦然りである、今便宜吾が國に於け



る迷信より之を研究する事とした。

迷信のよく行はるゝは人が世の大平を楽しんで居る時である、吾が國に於てはかの藤原氏の始め左京の貴族も一時承平、天慶の亂に驚かされて、氣も引きしまつて居つたけれ共、其后世は大平となり一般に遊惰に流て政務を疎んし、月に花に其他種々の遊びに耽り、住居衣服の美を競ひたる時の如き上下を通じて文達、祈禱、物忌等の迷信が盛んに行はれたる如き、その好例である、而かも吾が國に古く行はれたる夢に關する迷信を窺はんとすれば勢『三世相』によるより外はないのであるされば此所に『三世相』に掲ぐる所のものを抄録する事とした。

#### A 動植物に關するもの

熊||熊を見ればよき子を設くへし。

猫||猫獵をこると見ればよし。

草花||草花をこると見ればよし。

桑||桑を見れば小兒病む。

大木||大木をになふと見れば吉なり。

草木||草木を植ふると見ればよし。

木||門内に木はゆると見れば大によし。

#### B 天體に關するもの

天||天に昇ると見れば大に富貴すべし。

空||空晴るゝと見れば喜び事あるべし、空赤きも善し、雲四方に散ると見るは商に利あり。

h。

夜||夜明くると見れば病人は全快す。

霜||霜降ると見るは父母に別るゝ兆。

雪||雪降ると見れば喜び事あり。

雨||雨に會ふと見れば酒食に會ふべし。

雷||雷を聞くこみれば立身するなり。

#### C 其他に關するもの



石||庭に石をすえると見れば大に善し。  
 岩||岩に昇ると見ればよし。  
 土||土中に入ると見れば喜び事あるべし。  
 溝||溝を掘りせくと見れば大によし。  
 家||家の内に木はゆると見れば大に悪し萬慎むべし。  
 山||山崩ると見れば大に悪し。  
 洞||洞の中に入ると見れば大なる幸あり。  
 海||海を渡ると見れば大に善し。  
 仙人||仙人と會ふと見るはよし。  
 梨子||梨子を食ふと見れば人と和解す。  
 柿||柿を食ふと見れば病出づべし。  
 光||身より光出づると見れば立身すべし。  
 髪||髪を結ふと見れば喜び事あり。

刀||刀脇差を人に與ふと見れば大に悪し冠||冠を蒙ると見れば大に善し。  
 刀||刀をさすと見れば大によし若し(女が見れば縁談あり)。  
 小袖||新らしき小袖を着ると見るはよし。  
 齒||齒の抜けたる夢は憂き事のある兆。  
 井戸||井戸かへすると見ればよし。  
 汗||汗出づると見るは悪し。  
 風||風吹くと見るは悪し、病いづべし。  
 盃||盃を見ればよき子を設くべし。  
 米俵||米俵を見るはよし。  
 糸||糸を紡ぐと見るはよし。  
 鏡||鏡を見るはよし、されど鏡くもると見れば身に憂來り、破るゝと見れば大に悪しく  
 慎むべし、されど鏡を貫ふと見るはよし。  
 戸||戸が破ると見るは悪し、用心すべし。



蟻二疊の上を蟻一匍ふと見るは悪し。

舟二舟に乗ると見ればよし、尙帆船を見れば大によし、一般に乗物に乗ると見るはよし

橋二橋の上に座ると見るは大によし、渡るもよし

酒宴二酒宴を爲す所を見るは大によし。

飴二飴を食ふと見るは悪し。

衣服二衣服を着ると見るはよし。

泣く二泣くと見るはよし。

本二本を読むと見るはよし。

乳二乳を飲むと見るはよし。

弓二弓の絃切る、と見れば兄弟にはなる、弓矢を持つと見るはよし。

朝日二朝日出づると見れば大なる幸あり、月日を吞むと見れば善き子を得。

野山二野山に行くと見ればよし。

米二米をかむと見れば大によし、米空より降ると見るも亦よし。

屏風二屏風をたゝむと見れば命長し。

人二人多く集ると見れば病出づる兆なれど、人我が家より外に出でると見ればよし。

杖二杖をつくると見れば病出づ。

鳥居二鳥居を見れば幸來り富貴す。

玉二玉を貫ふと見ればよき子を設く。

鼓二鼓を打つと見れば悪し。

水二谷の水を飲むと見れば富貴す汲むと見るもよし。

錢二錢もうけすると見るはよし。

種二種まきと種まきすと見ればよし喜び事あり。

百足二百足にさゝると見るはよし。

龍二龍我が内に入ると見るは大によし。

橋柱二橋柱折ると見れば妻を失ふ。

琵琶二琵琶を弾くと見れば幸來る。



佛||佛と會話すと見るは大によし。

魚||魚の飛ぶを見れば喜び事來る。

白髮||白髮となると見れば大によし。

以上は古く吾が國に行はれて居つた迷信であるが、現今世にある夢の迷信は如何なるものであるか、余が今左に述べんとする所のものは、余が廣島高師在學中寄宿舎に於て三府二十六縣の友人より得たる材料に、近く生徒の父兄より得たるものを加へたるものである、尙此他に澤山有る事と思ふ。

蛇||蛇を見るは善し、白蛇を見れば錢を拾ふ。

蚯蚓||蚯蚓を見るはよし大に富貴す。

天||天に昇ると見るはよし。

洪水||洪水ありと見れば大なる喜び事あり。

地震||地震に會ふとみれば位のぼる。

雷||雷を聞くともみれば大によし。

火事||火事と見るはよし。

潮||潮満つと見れば人の頭となる。

山||山に登ると見れば喜び事ありされど下ると見れば災難に會ふ。

石||大石を得と見れば寶を得。

舟||舟に乗ると見ればよき人に會ふ。

龜||龜を見れば長命す、鶴を見るも亦全じ。

馬||馬を見れば喜び事あり。

鹿||鹿を追ふと見れば大によし。

虎||虎を見ればよし。

狐||狐を見ればよし、されど用心すべし人に信用損ふ事あり。

燕||燕を見ればよき友を得。

棺||棺を吾が家に入ると見るはよし。

扇||扇を見れば大によし立身す。



煙草||煙草をのむと見ればよし、惡事去る。

梯子||梯子によるとみるはよし。

朝日||朝日を見るはよし。

空||空晴るゝとみるはよし。

月||月をみれば長者より引立てらる。

殺害||人より殺害せられしとみるはよし。

死人||死人に會ふとみるはよし立身す

茄子||茄子を見ればよき子を得

|| を見れば富豪となる。

富士山||富士山の夢をみれば志なりて高宮の人となる。尙『富士のねとひとしき功をなすびなる、夢をみたかごとも嬉しき』と云ふ瑞紅の狂歌は人のよく知つて居る所である、一富士、二 三茄子なる語の廣く世に流布して居るのも亦謂なきにあらずである。

神輿||神輿をみれば親族に不幸あり、人死す。

喧嘩||人と争ふとみるは惡し、火事あり。

盗み||物を盗むとみるは惡し。

舟||舟を乗り出すとみるは惡し。

僧||僧侶をみれば惡し、神官を見るも全じ。

花||花をみれば慎むべし、外出すべからず。

牛||牛をみれば人より恨まる。

猫||猫をみれば物を失ふ。

蜂||蜂をみれば災難あり。

大魚||大魚をみれば惡し。

星||星落つとみれば太切なる人と別る。

婚禮||婚禮の夢は一般によろしくない。

祭禮||祭禮の夢も惡し。



齒||齒の抜けたる夢は大に悪し、下駄の齒の抜けたる夢も又全じ。

苟||苟を食ふとみるは悪し。

飯||飯を食ふとみるは悪し。

餅||餅を食ふとみるは悪し。

田植||田植の夢をみれば人死す。

湯||湯あみの夢をみれば不幸あり。

出産||出産の夢も悪し。

葬式||葬式の夢は大によし。

『三世相』に現はれたる迷信と現今のそれとを比較するに大體に於て一致せりと雖も又大に異つて居るものも少くない。

### 第二項 西洋諸國に於ける迷信

支那に於ける迷信は既に述べたる部に之を盡して居ると思ふされば、こゝに西洋諸國に於ける迷信に付て研究する事とした、かくて、ブラングリー氏の『デウリームズ、アンドゼア

インタープリテイション』を参考して面白いと思ふもの八十餘種を左に掲ぐる事とした。

猿||猿を見れば隠れたる敵あり。

鹿||鹿を見れば人と争論をなす。

犬||犬を見れば善き友を得ん、されど吠えられるれば却つて友を失はん。

狐||狐を見れば事業に失敗を招く。

兎||兎を見れば大によし、されど妻に子なし。

馬||馬に乗ると見るはよし。

驢馬||驢馬を見れば如何なる事も忍耐すれば成就す。

熊||熊を見れば旅行する事あるべし。

牛||牛に追はると見れば敵あり、逃るればよし。

獅子||獅子を見れば大によし。

獵||獵を見れば敵あり、損失を招く。

羊||羊を見れば善し、立身す



狼||狼を見れば横はれる敵あり。

アルモンド||アルモンドを食ふと見れば長途の旅行をなす、甘ければ善、酸ければ悪。

林檎||林檎を食ふと見れば長命す。

ベイコン||ベイコンを食ふと見れば悪し悲み事あり。

豆類||豆類を食ふと見れば苦痛、病氣の兆。

胡瓜||胡瓜を見ればよし、病人なれば病癒えん。

花||美しき花を集むと見ればよし、しほると見れば用心すべし。

櫻||櫻を見れば戀に悩む、事業にも失敗せん。

栗||栗を見れば富豪となる。

密柑||密柑を見れば悪し金を失ひ、賊に襲はる。

梨||梨を見れば富まん、又高官の人となる。

桃||桃を見れば大によし。

西瓜||女が西瓜を見れば外人の妻となる。

バインアクブル||バインアクブルを見れば人に招かる。而して其席上にて未來己が妻となるべき人と會はん。(未婚者なれば)

鳥||若し富める人鳥飛ぶと見れば悪し、貪しき人なればよし、歌へる所最もよし。

巢||鳥の巢に卵あるをみれば遺産を得べし。

カナリア||カナリアを見れば一般によく、籠に入れて運ぶと見れば財産を得、歌へるを見ればよき妻を得。

雛鳥||雛鳥を見るは悪し長途の旅行を慎むべし。

鳥||鳥飛ぶと見れば不幸あり。

時鳥||時鳥を見れば一時は戀に失敗するも終には理想の人と結婚せん。

家鴨||家鴨飛ぶと見れば富豪となり、泳ぐと見れば商人には大によし。

鳩||鳩を見れば事業に成功し友人より信用を受く。

蜘蛛||蜘蛛網を張ると見れば富豪となる。

蟻||蟻忙しげに働くと見ればよし。



蜂||蜂の働ける所を見ればよし。

蟹||蟹を見れば用心すべし、時の舟の覆る事あり。

鷺||鷺を見れば悪し。

雲雀||雲雀歌ふと見ればよし。

鶯||鶯を見れば希望ある兆、喜、幸、榮來らん若し病人なれば、快方に向はん。

雀||雀が戸口の所を飛び廻ると見れば大によし。

鸚鵡||鸚鵡を見れば遠方に旅行し、そこに長く止まらん。

孔雀||孔雀を見れば成功せん。

母||母、夢に現はるればよし。

別れ||人と別ると見れば悪し、病氣、不運あり。

住所||不思議なる所に住むと見れば身に變化あらん。

衣服||衣服の夢を見たる場合其色白ければ萬事成功し、緑なれば旅行し、青ければ幸福

あり紅なれば人によつて幸不幸全じからず。

虚言||虚言をはくと見れば友情、愛、眞實を示す。

失敗||事に失敗すと見れば用心すれば成功す。

伯母||伯母を見れば富と友を得ん。

嬰兒||嬰兒を見れば不安の兆、されど此場合は人によりて相全じからず。

小兒||小兒を見れば爲す事悉く成功す。

醫者||醫者を見ればよし。

夫||夫を一人持つと見るは悪し、未婚者は長く獨身のまゝ暮すに至る、されど寡婦がこの夢を見ればよし。

愚者||愚者を見ればよし、他人より利益を得ん。

幼兒||再び幼兒となりし夢はよし、尙少年時代の事を大人が見れば大によし。

王||王の前に行くこと見るはよし名譽と地位を得ん。

棺||棺を見るは親友又は大切なる人の死を示す。

血液||血液を見るは悪し、頓死、損失、失望の兆。



結婚||結婚すと見れば悲、失望あり。

鎖||鎖につながると見るは悪し。

病氣||病氣の夢は病癒ゆる兆。

身体||身体肥えたりと見るは大病に罹る兆。

火事||火事と見るはよしされど焼かれたりと見れば悪し。

葬式||葬式の夢は一般によし、結婚の期早く財産を得ん。

幽霊||幽霊を見るは悪し、失望せん。

獄屋||獄屋を見れば繁榮の兆。

空||空に昇ると見るはよし。

太陽||太陽を見れば戀に成功し、富豪となる。

齒||齒のよく揃へる所を見ればよし、抜けたりとみるは病氣の兆にして、生へたる夢は

友人の死、悉く抜けたりとみれば自分の死を示す。

泣く||泣くとみれば事に成功し幸あり。

富貴||富貴すとみれば病氣又は不運の兆。

酒||器に酒満つとみれば繁榮の兆。

チーズ||チーズを食ふとみれば利あり。

ユーヒ||ユーヒを飲むとみれば富と名譽を得ん。

レモン||レモンを食ふとみるは大病の兆。

極樂||夢に極樂をみるはよし。

慧星||慧星をみるは大に悪し、戦死の兆。

地震||地震に會ふとみれば悪し、苦痛、家内不和の事あるべし。

洪水||洪水ありとみれば船乗りにはよし。

尚ブラングリー氏の説ぐ處は二百餘程を残して居るけれ共此所にはその内の一部のみを掲げたのである、之を吾が國に於ける迷信と比較するに彼此一致せる所少からず、されど人情風俗を異にせる西洋諸國の迷信が吾が國のものとは異なるは自然の理、又怪むに足らないのである。



唐の段成式が酉陽雜俎に悪夢を避けんとすれば主夜神の咒を書きて寢所の上にはり置きて悪夢を除くべしと云へり、と三世相に云つて居る、即ち『婆珊婆演帝』と書きて之を寢所の上に貼り置くべしとなり、尙伊豫の今治地方にては若し悪夢に襲はるゝ如き事あれば『昨夜夢みた大きな夢を枕の下の玉手箱、開いてみれば何もなし』と稱ふれば再び悪夢に襲はるゝ如き事はないと云つて居る。

## 第十章 聖書に現はれたる夢の研究

### 第一節 舊約全書に現はれたる夢の研究

聖書に現はれたる夢の研究は容易に之をなす事は出来ない、而かも聖書に全く通じない余が計らずもこの項を草するに至つたのも亦何かの縁ではあるまいか、今聖書中の夢を研究するに當つて便宜上舊約全書を先にして新約全書を後にしたのである、尙各夢に付て其大意のみを掲ぐる事とした。

ヤコブの夢 Ⅱ ヤコブがベルシバよりスラン方面に至る途中日暮れて某所に宿つた、夜に

入つて夢に梯が地にたつて、其嶺は天に達し、神の使者がそを昇降して居る所をみた、エホバ其上に立つて『汝が臥する所の地は我之を汝と其子孫に與へん、又吾が汝の往く所に汝を守り、事の成功あるまでは汝を離れぬ』と云つたのである。(創世記)

獄中の夢 Ⅱ 獄に繋がれたるエヂプト王の洒人と膳夫の二人共に一夜の中に各夢を見た、其夢はおのゝその説明にかなふ。ヨセフは翌朝彼等の所に入て視るに彼等物憂げに見えた、これ彼等は夜の夢を解く者がなかつたからである、ヨセフ彼等に謂けるは『解く事は神によるにあらずや請ふ我に述べよ』洒人の長その夢をヨセフに述べて謂けるは『わが前に一の葡萄樹あり、その樹に三つの枝あり芽いで花開きて葡萄なり房をなして熟したる様であつた、時にパロの爵わが手にあり我葡萄を摘てパロの爵に搾り之をパロの手に奉つた、ヨセフ之を説明して謂ひけるは、『三の枝は三日なり、今より三日の中にパロ汝の首を擧げ汝を故の所に歸さん汝は曩に洒人たりし時になせし如くパロの爵をその手に奉るに至らん』と茲に膳夫の長を解明の善かりしを見てヨセフに云ふ、『我も夢を得て見たるに、白きパン三筐わが首にありて、その上の筐には膳夫がパロの



爲めに作りたる各種の饌ありしが、烏わが首の上の筐の中より之を食へり」と、ヨセフ之が解明をなして謂けるは『三の筐は三日なり、今より三日の中にバロ汝の首を擧げはなして汝を木に懸けん、而して烏汝の肉を食ひとるべし』と三日の后果してその通りになつた。(創世記第四十章)

バロの夢二年の後バロ夢みる事あり、河の邊にたちて視るに七の肥えたる美しき牝牛河より、のぼりて苜蓿を食ふ、その後又七の醜き瘦せたる牛河よりのぼり、前の牛の側に立ちしが、その醜き牛か肥えたる七の牛を食ひ尽せり、バロこゝに至りて覺む、彼また寝りて再び夢みるに一の莖に七の肥えたる佳き穂が出て來たその後又又しなびて東風に焼けたる七の穂が出て來たが後より出でたる穂が前に出でたる七の穂を吞尽した、バロ覺めて見るに夢であつた。

王は心安からず思つて法術士を集めて解明を求めたけれ共解く者がなかつた、バロは酒人の長の言を容れて獄中のヨセフを召して之に解明を求めたヨセフ謂けるは『其夢は一である、神その爲さんとする所をバロに示し給へるのである、七の美牝牛は七年、

七の佳穂も七年であつた、夢は一である、その後には七のぼつた、七疋の瘦せたる醜き牛は七年であつて、東風に焼けた七の空穂は七年の饑饉である、エヂプトの全地に七年の豊年あり、その後七の凶年あらんと、果してその如くであつた。

ギデオンの夢ギデオン嘗て陣中に至りし時、或人其夢を語りて居り、即ち云ふ『我夢を見たりしが夢に大麥のパン一つミデアンの陣中に轉び入りて天幕に至り、之をうち仆し覆したれば天幕倒れ臥したり』その友答へて曰く、『これギデオンの劍に外ならず、神ミデアンとすべての陣營を之が手に付し給ふなり』と果してその通であつた。

(士師記七章)

大夢 大夢は事の繁多によりて生じ、愚なる者の聲は言の衆多によりて識るなり、

(傳道立書第五章)

耶利米亞記 全章第二十七章に『汝等の預言者汝等の占筮師、汝等の夢みる者汝等の法術士、汝等の魔王士汝等に告げて、汝等はバヒロン王に事ふる事あらじといふとも聽くなかれ』とある研究すべき言であると思ふ。



ネブカデネザルの夢 其治世の二年に王夢を見、それが爲めに心に思ひ惱んで復睡る事が出来なかつた王は、こゝに博士と法術士と魔術士とカルデア人を召して彼等に王自身が如何なる夢を見たか云ふ事を告げないで、彼等に解明を求めた、而して『汝等もしその夢とこれが解明とを我に示さざるに於ては汝等の身は切裂れ汝等の家は厠にせられん』と申された、……是に於てダニエルは王がバビロ智者等を殺す事を命じ置けるアリオクの許に至り、我を王の前に引きいたれよ、我その解明を王に奏すべしと、かくて王の前に云ひけるは、『王の問ひ給ふ秘密は智者、法術士、卜筮師など之を王に奏上する事を得ず、然れど天に一の神ありて、秘密を現はし給ふ、彼後の日に起らんところの事の如何なるかをネブカデネザル王に知らせ給ふなり、汝の夢汝が牀にありて想ひ見給ひし汝の腦中の異像はこれなり、王よ汝牀に入りし時將來の事の如何を想ひ廻し給ひしが秘密を顯はす者將來の事の如何を汝に示し給へり……』と尙其解明をした、その夢は誠にして解明は確實だつた、此所に於てネブカデネザル王は俯伏してダニエルを拜し禮物と香をこれに獻ぐることを命じた、而して王答へてダニエ

ルに云ひけるは汝がこの秘密を明かに示す事を得たるを見れば誠に汝等の神は神の中の主にして能く秘密を示す者なりと、かくて王はダニエルに高位を授け種々の大なる賜物を與へて、之をバビロン全洲の總督となし又ダニエルの願によりてシヤデラクとメシヤクとアベデネゴを擧げてバビロン洲の事務を司らしめたりと、即ちダニエルは夢の解明をなし得たる爲めに高位高官の人となつたのである。(但以理書第二章)

ダニエルの夢 Ⅱ バビロンの王ベルシャザルの元年にダニエル其牀にありて夢を見腦中に異像得たりしが即ちその夢を記してその事の大意を述ぶ、ダニエル述べて曰く我夜の異像の中に見てありしに四方の天風大海にむかひて烈しく吹きたり、四個の大なる獸海より上きたれり、その形は各異なり第一のは獅子の如くして鷺の翼ありけるが我見て居りしに、是はその翼を抜きとられ、まだ地より起され人のごとく足にて立たされ且人の心を賜はれり、第二の獸は熊の如くなりき、その口の齒の間に三個の服骨を啣へ居けるが之に向ひて云へる者あり曰く起あがりて許多の肉を食へと、その後我見しに豹の如き獸いでたりしが、その背には鳥の翼四つあり、この獸はまた四個の頭あ



りて統轄權をたまはれり、其後第四の獸いでたりしが是は畏しく猛く大に強くして大なる鐵の齒あり食ひかつ咬碎きてその殘餘をば足にて踏みつけたり、而して十個の角ありたり、その内又一個の角出でしがこの角の爲めに先の角三個その根より抜け落ちたり、この小さき角には人の目の如き目あり、又大なる事を言ふ口あり……我觀つゝありけるがその獸は終に殺されて燃ゆる火に投げ入れられたり……、我また夜の異像の中に觀てありしに、人の子の如き者雲に乗りて來り、白の老いたる者の許に到らたれば、即ち其前に導きけるに、之に權と榮と園とを賜ひし諸民諸族をして之に事へしむその權は永遠の權にして移り去らず、その國は亡ぶ事なし是に於て我ダニエルその體の内の魂を憂ひしめわが腦中の異像の爲めに思ひ悩みたれば、即其所に立つる者の一個に就てこの一切の事の眞意を問ひけるに其者我にこの事の解明を告げしらせて曰く、『と而してこれが解明を細はしく述べて居る、此夢は實に複雑なる不思議なる夢である、之が解明は之を聖書に譲る事とした。(但以理書第七章)

虚偽の夢 汝等春の雨の時に雨をエホバに乞へ、エホバ電光を作り大雨を人々に賜ひ田

野に於て草蔬を各に賜ふべし、夫レテラビムは空虚しき事を云ひト筮師はその見る所眞實ならずして虚實の夢を語る其慰むる所は徒然なり、是をもて民は羊のごとくに迷ひ牧者なきによりて悩む……と又味ふべき言ではあるまいか。(撒加利亞書第拾章)

舊約全書に現はれたる夢を通觀するに多くは神怪不可思議なるものである、尙その解明の巧妙なるは驚嘆に値すと思ふ、彼のダニエルの如き古來夢の解明者として等しく人の賞する所である。

## 第二節 新約全書に現はれたる夢の研究

ヨセフの夢 Ⅱイエスキリストの母マリヤはヨセフと聘定を爲せるのみにて未だ偕にならざりし時、聖靈に感じて孕みしが其孕みたること顯はれければ夫ヨセフ義人なる故に之を辱むる事を好まず密かに離縁せんと思へり、斯て此事を思ひ廻らせる時に主の使者彼が夢に現はれて曰けるは、ダビデの裔ヨセフよ爾妻マリヤを娶る事を懼るゝ勿れ、その孕める所の者は聖靈に由るなり、かれ子を生まん、其名をイエスと名くべし蓋しその民を罪より救はんとすれば也……ヨセフ寢より起きて主の使者の命せし言に遵



ひ其妻を娶りたれど家子の生るゝまで牀を共にせざりき其生れし子をイエスと名づけたり。(馬太傳第一章)

ヨセフの夢第二〇ヘロデ密に博士等を召し星の現はれし時を詳かに問ひ、彼等をベデレヘムに使はさんとし曰けるは往て嬰兒の事を細に尋ねてこれに遇はゞ我に告げよ我も亦ゆきて拜すべし、彼等王の命を聞きて往けり、先に東の方にて見たりし星彼等に先だちて嬰兒の居所に至り其上に止まりぬ、彼等此星を見ていたく喜び既に室に入りければ、嬰兒の其母マリアと偕に居るを見俯伏して嬰兒を拜し寶の盒を開きて黄金乳香没薬など禮物を獻げたり、博士夢にヘロデへ返る勿れとの默示を蒙りて他の途より其國に歸れり、彼等が去る後主の使者ヨセフの夢に現はれて曰けるはヘロデ嬰兒を索めて殺さんとする故に起きて嬰兒と其母とを撃へてエジプトに逃れて復わが示さん時まで彼處に生まれ、ヨセフ起きて夜嬰兒と其母とを撃へてエジプトに往きヘロデの死ぬるまで、其所に生まれり、是れ主預言者によりて我が子をエジプトより召し出せり、と云ひ給ひしに應せん爲なり、是に於てヘロデ博士に欺かれたるを知り、大に怒り、

人を遣して博士に評して問たる時を度りベデレヘムと其競の内なる二歳以下の嬰兒を悉く殺せり、即ち預言者エレミアの言に、歎き悲み憂ふる聲ラスに聞ゆ……かくてヘロデ死にたれば主の使者ヨセフの夢にエジプトに現はれて曰けるは、起きて嬰兒と其母とを撃へイスラエルの地に行け、嬰兒の生命を索むる者は已に死ねり彼起きてその如くせしか、アケラヲ父ヘロデに代つてユダヤの王たりと聞きければ彼處に行く事を懼る、又夢に告を蒙りてガリラヤの内に避け、ナザレと云へる邑に至りて居れり……』(馬太傳第二章)

この夢を視るにヨセフは夢のまゝに行動して而かも誤らなかつたのである。

## 結 論

以上は大體の研究に過ぎぬ、而かも此研究を第一章として世人が今少し此方面に注意を拂ひ、心理學上、又實際の教育上此夢が興味を以て迎へられその研究の益々盛んならん事を希望して止まないのである今此稿を閉ぢんとするに際し、和歌十首を掲げて結論にかへ



たのである。

嵐吹く高嶺のくもをかたしきて夢路も遠しうつ山ごえ

前大納言忠良

現には又も歸らぬいにしへをこたび見るは夢路なりけり

前参議彦良

おのづから心通ふを見る夢も覺むればうさに又返りぬる

近衛關白前右大臣

長き世の始め終りもしらぬまに幾世の事を夢に見つらむ

花山院御製

覺め難みしばし現になしかねぬ哀れなりつる夢の名残を

(風雅物語)

迷ひこし浮世の夢をぬるが内に見はてゝ覺むる曉もがね

昌義法師

長き世の夢を夢ぞとしる君は覺めて迷へるひとを助けむ

高辨上人

誰も皆まだ覺めぬ間の夢とのみ心をとむる程のはかなき

轉寢につれなく見えし面影を夢と去りても猶やうらみむ

常盤井入道前大政大臣

七十そじの過ぎにし方は夢ぞとも知るこそけふの現なりけれ

前大僧正忠源



大正六年六月二十日印刷  
大正六年六月廿五日發行

(定價參拾錢)

著者

須之内重德



發行者

愛媛縣越智郡今治本町二一一番戶

阿部利三郎

印刷者

愛媛縣越智郡波止濱町大字波止濱  
六九九七〇番地

橋濱泰吉

印刷所

愛媛縣越智郡波止濱町大字波止濱  
六九九七〇番地

原印刷所

發行所

愛媛縣越智郡今治町本町二一一番戶

阿部書店



K 12



23



339  
971



終